

特集

麗澤型PBL学習



PBLとは

Project-Based Learning (プロジェクト遂行型学習)、または Problem-Based Learning (問題解決型学習)の略で、アクティブ・ラーニングを実践する手法の一つとして位置づけられている。身近な問題や事例を素材としながら、プロジェクト遂行や問題解決に学生が主体的に取り組むことを通じて、課題発見能力や問題解決能力を育むことを企図したものである。授業で学んだ知識を実践で活かす機会として注目されており、麗澤大学では平成26年度よりこのような教育改革を実施する教員と学生のグループを支援している。

地域と連携する麗澤型PBLへの全学的取り組み

学修支援センター長・教授 籠 義樹



大学教育におけるPBLの重要性

近年、大学教育についての社会の評価は厳しい。4年間の投資に見合うような教育を行っているのか、社会で通用するような人材育成を行っているのか、といった批判である。私が大学生であった頃もレジャーランドと揶揄されるなど、大学教育は常に批判に晒されてきたのであるが、当時はまだ社会に余裕があったのであろう。批判はしながらもどこかモラトリアムを許容するような雰囲気や学生に対しても大学に対してもあったように思う。しかし、景気の低迷が継続し、経済の潜在成長率がゼロ付近に

まで低下し、少子高齢化社会が既に到来した現在では、大学教育の社会的役割が強く問われる時代となった。

大学において学生は学問的専門性を身に付ける。それは今も昔も変わらないのであるが、それに加えて近年重要視されているのが、自らが課題を発見し、どうすればよいかを考え実践する人材の育成である。日本のように経済的にも文化的にも成熟した社会において、今以上の豊かさや便利さを獲得するには、技術的な面に留まらない広い意味でのイノベーションが必要なのである。そうした人材育成のためには、答えの無い問題について学生自らが考え

試行錯誤する機会が必要であり、従来の知識伝達型の教育とは異なるアプローチが必要とされている。

そのため、本学に限らず近年多くの大学で導入が進んでいるのが、アクティブ・ラーニングやその1つの形態としてのPBL (Project-Based Learning: プロジェクト遂行型学習、または Problem-Based Learning: 問題解決型学習) である。元々アクティブ・ラーニングは、授業における学生と教員の双方向性を高めるこ



とを志向したものであったが、現在では学生の汎用的能力の育成を図るものと捉えられ、そのためにはいかに授業の双方向性を増しても学生が受動的である限り不十分である。つまり、学生側が自ら考えて問題解決のために教員や授業を能動的に使うようになっていかなければならない。そしてPBLは、そうしたアクティブ・ラーニングを実践する手法の1つとして位置づけられ、プロジェクト遂行や問題解決に学生が自ら主体的に取り組むことを通じて、課題発見能力や問題解決能力を育むことを企図したものである。

一口にPBLと言っても、その内容や学生と教職員の関わり方は様々である。仮想的なシミュレーションのようなものもあれば、現実のプロジェクト遂行や問題解決に取り組むものもある。当然後者のほうが多くのリソースを必要とし、教職員にかかる労力も大きい。うまくできれば教育効果も高い。また、大学の中で閉じて行うのではなく、行政や企業、NPOなど、地域社会と連携して行うことができ

ば、学生に社会的存在としての自分を自覚させ、自分が社会に貢献できることを成功体験として獲得させることにつながり、それがまた次の学びへのモチベーションとなることが期待できる。本学では教職員一丸となってより教育効果の高いPBLの実践に取り組んできており、以降ではそのこれまでの成果と今後の展望をご紹介する。

本学におけるこれまでのPBL的取り組みと課題

本学でこれまでに行ってきたPBL的な取り組みは、その実施形態から大きく3つに分類される。まず、①授業として行われるが、学生自らが課題を設定し、その内容を考えて担当教員の依頼までを行う自主企画ゼミ、次に、②授業として行われることは同様であるが、その内容や体制はある程度担当教員がコーディネートする企業・社会実習のような科目、そして、③授業とは関係のない取り組みではあるが、必要に応じて教員が学生のサポートをしたり、大学が費用面で補助したりする模擬国連のよう

な取り組みである。

自主企画ゼミを活用したPBL的取り組みの先駆けは、外国語学部成瀬猛教授が2012年度から行っているマイクロネシア連邦ボンペイ島における小学校およびコミュニティセンターでの環境教育プロジェクトである。成瀬教授は、まず学生たちにプロジェクトのPDCA [Plan (計画)・Do (実行)・Check (評価)・Action (改善)] サイクルに関する理論的講義とPDCAサイクルを管理運営するためのPCM [Project Cycle Management] 手法の使い方を指導する。プロジェクトをチームで動かす場合には、プロジェクトの運営管理に関する基本ルールをチーム内で共有しなければならぬからである。その上で、どのような環境教育を誰に対して行うかといった主たる内容や実施工程計画は、学生が主体的に考えて実施するものである。このプロジェクトには複数年にわたって継続的に参加する学生が多く、上級生が新たな参加者を指導するピアラニンング態勢が築かれている。このプロジェクトの成果に触発され

る形で、2014年度には外国語学部内尾太一講師がサポートするカンボジアの小学生に対する交通安全教育プロジェクト、梅田教授がサポートするネパールの小・中学生に対する減災教育プロジェクトなどが学生の発意に基づいて行われるようになり、プロジェクトの種類や参加する学生に広がりが見られるようになっていく。

また、企業・社会実習については、経済学部佐藤仁志教授と私が共同で実施するNPO法人への学生のインターンとしての参画などがある。NPO法人かしわ環境ステーションは、2011年度より本学の学生をインターンとして受け入れ、参加する学生は主にその活動内容と成果を広く市民に知ってもらうための広報の役割を担ってきた。2016年度は、環境ステーションの予算と人的リソースを活用し、その活動を小学生を対象にしてレクチャーするイベントを企画して実施した。イベント参加者の満足度は非常に高く、環境ステーションにとっても通常の活動を通してはアクセスが難しい対象に認知を

広げる上で効果的なイベントであったと評価された。以上で述べたような、学生が自らプロジェクトや問題を設定し、施設や制度、教職員と言った大学のリソースの活用を考え、成果を得るまで能動的に取り組んだPBLは、本当に学生の成長につながる。成長を一言で表現するのは難しいが、目を社会に向け、自分が活躍できる場や貢献できる課題を探し、どうすればよいか(問題解決方法)を自分で考えて行動できるようにするのである。そうしてまた次の成功体験を獲得し、社会的存在としての自分に自信を深めて社会に出て行くことができる。

しかし、そうしたPBLを自らの発意に基づいて実践できる学生は残念ながら多くはない。一部のアクティブな学生が、自主企画ゼミのような機会をうまく活用して、自らの成長を自ら促している状況と言えようか。大きな教育効果があることは分かっているわけであるから、大学としてはより多くの学生がPBLに取り組めるように仕掛けていく必要がある。それは、必修科目のような強制ではなく、PB

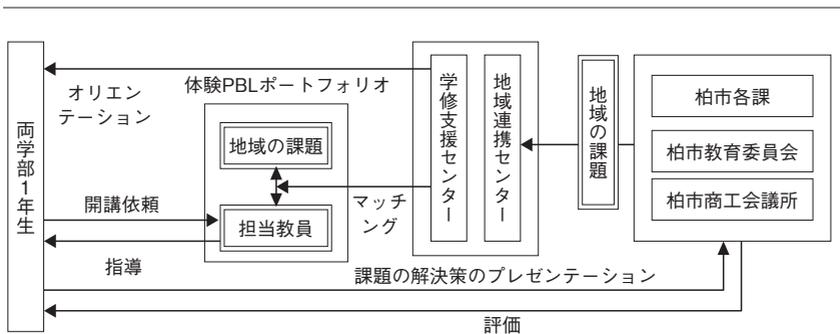


図 本プログラムのイメージ

- ・ 柏市・柏市教育委員会・柏市商工会議所などと連携し、地域の課題を10〜20テーマ設定するとともに、学修支援センターが各テーマの担当教員を、地域連携センターが柏市の担当課をマッチングさせる。

- ・ 1年次の基礎ゼミなどにおいて、これまでのPBLの成果報告や本プログラムのオリエンテーションを行い、本プログラムの履修を促す。
- ・ 興味を持った学生は、自分が取り組みたい課題の担当教員にPBL体験科目の開講を依頼する。担当教員は、チーム体制や取り組み方、スケジュール等について学生にアドバイスするとともに、柏市の担当課に協力を依頼する。
- ・ 学生は、市へのヒアリングを行うなどの調査を行って解決・改善策を考案して、柏市の担当課にその提案をプレゼンテーションして評価を受ける。
- ・ 2学期開始前にPBL体験科目の成果報告会を開催し、本プログラムの履修者同士での情報交流を図る。
- ・ 履修者には、2年次以降の本格的PBLへの参画を強く促し、2学期の早い段階で、企画立案・教員への依頼を行うよう伝える。

本プログラムの特徴は、柏市が現実として直面する課題を取り上げ、その調査や学生の提案の評価を大学と柏市が連携して行う点にある。柏市にヒアリング調査に行くためのアポイントメント取りなどは

Lの効果に気付いて、次からは自ら能動的に取り組むきっかけとなるような機会であればならない。また、学生たちの積極性を引き出す努力と共に、教職員側も授業内容や教育方法のさらなる改善に組織的に取り組み、PBLを有効裏に運用できるノウハウを共有化し、教職員側の能力向上を同時に図っていく必要性がある。

1年次におけるPBL体験の実施

大学までの通常の学校教育を想定すると、自らから課題を設定したり、その解決のために学生のほうから大学のリソースを使うことを考えたりすることは、あまり簡単なことではないと思われる。授業も学校設備も各種教務サービスも、これまで与えられるものばかりであったわけだから、大学生になったからと言って「さあ、これからは自分で考えましょう」と言われても、多くの学生は戸惑うだけであろう。必要なのは、教職員も大学の設備も望めば自らの意思で活用することができ、自分が取り組みたい

プロジェクトや問題解決のための協力が得られることを実感し、自ら発意するPBLにつなげていくための機会である。

本学では2017年度から、学部問わず全ての1年生に対して、夏休みにPBLを体験するプログラムを授業として提供する。PBL的な取り組みを体験して小さくてもよいから成功体験を獲得し、その後の能動的な取り組みにつなげていくことを主眼とするものである。体験であるから、課題設定や協力が得られる教職員などの大学のリソースといった、PBLに取り組み際のハードルとなる部分はぐっと下げて、大学側がお膳立てをする。この体験を通じて、PBLの基本（準備・手続き）や全体像（実施フロー）を把握するとともに、どの教職員がどういった課題に対応可能か、どういった施設や設備が活用できるかを知ること、やがて自分が発意する場合のPBLをイメージしやすくすることを狙っている。

具体的には、次のようなプログラムである(図参照)。

学生自身がやらなくてはならないし、提案をプレゼンテーションして評価やコメントをもらうのも柏市の担当課である。もちろん担当教員は、学生が考える調査からプレゼンテーションに至る計画や作業項目について指導は行うとともに、トラブル発生やミスを犯した場合のフォローは行うが、実際に学生が成果を得るために働きかける相手は柏市である。高校を卒業したばかりの1年次生にとって、学外の方の協力を取り付けることは初めての体験である場合が多く、容易ではないことが予想されるが、それができるといことを大学生生活の早い段階で経験しておくことは重要である。大学における学びは、社会に目を向けて、自分がそこでいかに生きていくかを想定し、自らがコーディネートしなければならぬからである。

大学教育にとっての地域連携の意味

大学と柏市と連携して遂行する本プログラムが可能となったのは、これまでに様々な形での協力や連

携事業を行ってきた成果の蓄積があることは論を俟たない。しかし、授業として実施するプログラムに、言わば教育協力者として関わる今回の形は、連携の在り方をまた一歩先に進めた感がある。PBLに取り組むにあたっては、学生が行動するフィールドの設定が必要となる。もちろん、そのフィールドは大学が立地する地元である必要はなく、本学のこれまでの実績のところでも述べたように、ミクロネシアやカンボジアといった海外であってもよく、そのほうが華やかで良い場合もあるのだが、1年次生全員を対象として全学的に取り組むとなると学生自身のキャパシティに加え、時間や費用の問題もあるが、地元自治体の協力は非常に大きい。

本プログラムは、将来を担う若者の育成に地域ぐるみで取り組む先駆的な事例となる可能性があり、多大な協力をいただいている柏市に心から感謝申し上げるとともに、この貴重で有用な機会をできるだけ多くの学生が活かす、自らが大きく成長するきっかけとしてくれることを強く願っている。

〈特集〉麗澤型PBL学習

ミクロネシアPBL型体験学習

外国語学部教授 成瀬 猛



高等教育の改革が文部科学省の中央教育審議会での議論が開始されて久しい。平成12年前後に最も集中的に審議されたのが、国際社会のグローバル化に伴

って、グローバル人材を如何にして育成するかという議論であったと記憶している。国が求める質の高い高等教育を提供できる大学マネジメントが行われているか否かが問われる時代になってきているのは確かである。国が求める理想的な大学像に照らし、麗澤大学が追求すべき大学教育とは如何なるものなのかを明確化し、現実像として捉えることがまさに重要なのである。

ところで、平成12年に中教審が出したグローバル

化教育促進に関する答申の中に、次のような内容が記されている。

(実体験の重視や職業観の涵養)

多様な文化や価値観を受容し、その中で自らの考え方を主張し、行動できる心豊かな人材を育てるためには、知識の修得だけでなく、多様な文化に触れたり、多様な価値観を持つ人々と交流を行ったりするなどの実体験を持つことが必要である。

(教員の教育能力や実践的能力の重視)

大学が社会の多様な要請に応え、質の高い教育を提供するためには、教育に携わる教員の教育能力や実際の社会経験によって培われた実践的能力を重視

する必要がある。また従来の教員の評価は、研究能力に偏する嫌いがあるとの指摘があるため、大学設置基準等における教員の資格については、教育能力や実践的能力を従来以上に重視する方向で見直す必要がある。

行政の求める大学の在り方に対して、麗澤大学では、以下のような教育理念、麗澤教育のめざす人間像とグローバル化ビジョンをHPに掲載している。

（教育理念）

麗澤教育は、創立者廣池千九郎が提唱した道徳科「モラロジー」に基づく知徳一体の教育を基本理念とし、学生生徒の心に仁愛の精神を培い、その上に現代の科学、技術、知識を修得させ、国家、社会の発展と人類の安心、平和、幸福の実現に寄与できる人物を育成する。

（麗澤教育のめざす人間像）

一、大きな志をもって真理を探求し、高い品性と深い英知を備えた人物

一、自然の恵みと先人の恩恵に感謝し、万物を慈し

み育てる心を有する人物

一、自ら進んで義務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物

（グローバル化ビジョン）

麗澤大学では、学則に「特に世界的・国際的識見を備えた有能な人材を養成することを目的とする」と定める通り、1935年の創立以来、国際社会に貢献できる人材養成に努めてきました。この方針をさらに徹底し、「国際交流活動を活発に行う大学」として、以下の6分野についてビジョンを策定いたしました。

ここでは6分野（1、学内の国際化 2、学生の海外留学の促進 3、外国語教育の充実 4、外国における就業力の育成、外国人留学生の日本での就職支援 5、海外大学等との連携 6、地域のグローバル化への貢献）のビジョン全てを紹介することは誌面の関係で省くが、大学を挙げて、国際化に取り組む具体的な項目が列記されているので時間がある方はご覧

いただきたい。

これから紹介するPBL型学習とその成果（学生たちの自己成長認識）は、麗澤大学の国際化教育が、行政からの求めに対して、単に理想を描いたものではなく、現実として始まっていることを示す試金石と捉え、是非、学内でも活発な議論に資することを希望する。

ミクロネシアPBL型体験学習を始めて、2016年の夏の現地研修で第4次の派遣となった。その間、学生たちは代変わりしてきたが、経験豊富な上級生が初めて参加する下級生に対して、ミクロネシアの環境問題や参加型プロジェクト形成手法を指導し、現地では安全管理や生活を含めて細かく面倒を見てくれるようになった。ピアラーニングの形が根付いたことは、この学習方法を取り入れて発現した大きな成果の一つだと言える。先輩たちが後輩たちの面倒を一生懸命に見れば、後輩たちは先輩たちの恩に報いようとして、また一生懸命に頑張る。年を

追うごとに内容もより充実していくし、学生たちは黙っていても自ら成長していくという良い循環が生まれた。

やがて学生たちの成長と熱心さは、麗澤大学とミクロネシア短期大学との留学・交流協定の締結を齎し、2016年には、京都の立命館大学とのミクロネシアを対象として両校で交流しながら取り組むという協力協定も結ばれた。

学生たちの変化を毎年見ていると、「日本の大学生は内向きになった……」とよく言われるが、彼らが内向きになったのではなく、内向きにさせてきた社会的責任をむしろ痛感する。「いい子」という評価を受けるために、子供たちは「可もなく不可もなく」日常を過ごす術を知らず知らずのうちに身に付けてしまった。そして「いい大学」に入ることが高校までの教育の至上命題化された結果、大学に入った途端に「現状に満足」する若者を多数作り出してしまったのではないだろうか。「いい大学」とは一体どのような高等教育を提供できる大学のことを指



COM学生との会談の様子

しているのだろうか」とふと疑問に思う時がある。「内向き学生」と呼ばれる彼等はそれなりに日々沸々とした思いを持って大学に通っていることだろう。彼らにちょっとした機会さえ作ってやれば、何のことはない、生き生きと自主的に動き出し、勉強もするようになることをマイクロネシアでのPBL型学習を通じて証明できたような気がする。

それでは、この5年間やってきた軌跡をご紹介したうえで、5年間の経験の中から抽出できた「麗澤型PBL学習」確立への提言をさせていただくことにする。

1回目(2012年夏) まずは下見的な調査を行い、ポンペイ島が学生たちによるPBL型スタディツアーに適していることを確認した。特に、美しい島の自然、急激な物質文化の襲来、島のユニークな文化、治安の良さは大学学部生レベルのPBLには好条件がそろっていた。

2回目(2013年春) Salixと呼ばれる任意の学

生団体(国際教養力を付けるために集まった学生たち)からの要請を受けて、アドバイザーを引き受けた。Salixがスタディツアー目的地としてマイクロネシアを選択したので、同年の春休み、学生たちと一緒にポンペイ島を訪問した。この時に、マイクロネシア短期大学との接点ができた。因みに、麗澤大学と



現地で行われた日本祭りにも参加

マイクロネシア短期大学との正式な交流協定が結ばれたのも、この学生交流がきっかけとなった。

3回目(2014年夏) Salixに参加したIEC(国際交流・国際協力専攻)2年生の梅原勇希君が新たに自主企画ゼミを立

ち上げ、マイクロネシアを対象としたPBL型体験学習を行うことになり、プロジェクト形成を目的とした現地調査を行った。この時に、COMと環境分野で協力し合うことが合意され、プロジェクトとして「環境教育」を行うことが決まった。自主企画ゼミの名称も「Japanesia」に改名された。梅原君は、その後、在学中に青年海外協力隊に応募し、見事、一発で合格を果たし、卒業後は「環境教育」分野の隊員として、ポンペイの環境局に派遣されることになった。

4回目(2015年夏) 環境教育プロジェクトの1年目として、英語・英米文化専攻4年の筋晶子さんをリーダーとする新規Japanesia(7人)が、COM生と協力して、小学校やコミュニティセンターで環境教育を実施した。この時に、広報担当が撮影したJapanesiaの活動ぶりを動画作成し、YouTubeにもアップされた。 <https://www.youtube.com/watch?v=HFLb1wqkxkve>

5回目(2016年夏) リーダーは経済学部4年

の久徳謙介君が務め、前年度の問題点を改善する形で現地での環境教育を行った。また、今回は京都の立命館大学生7人がオブザーバーとして参加し、新たに2大学間での交流型PBLへと発展した。

この時点で、既に、麗澤大学とマイクロネシア短期大学との間で交換留学が始まっており、麗澤大学か



小学生への環境意識調査

らは国際交流・国際協力専攻の男子学生（3年生）がCOMでマイクロネシアおよび太平洋地域の文化について英語で学んでいる。

ここからは、マイクロネシアPBL海外体験型学習を通じて得られた成果と所感について述べながら、麗澤大学におけるPBL型学習定着に向けての課題について幾つかの提案をしたい。

①フィールド選びのポイント

PBL学習を実施する上で一番大きなポイントがフィールドの選び方と言っても過言ではない。学生たちの主体的活動を担保するためには、まず安全第一でなければならぬ。その上で、PBL学習の主題とも言える課題発見と問題解決の考案・実施が、取り組む学生のレベルに合っていないければならない。あまりにも問題の背景要因が複雑で、解決策が見出し難いようなフィールドは適当ではない。また、現地で活動する場合は日本人学生と一緒に考

え、行動してくれるカウンターパートの存在も極めて重要である。その国の大学やNPOをカウンターパートとして見出せば、大抵の場合、英語のコミュニケーション力のアップも図れ、フィールドとしては申し分ない。

PBL学習を行うフィールド選びは、学生任せにしないで、学内にPBL型学習に関する相談センターのようなものがあることが望ましい。

②PBL学習に参加する学生の選抜

PBLは学生の総合力を高めるのに非常に有効な学習法だと思われるが、どんな学生に対しても有効かは未だ確証が持っていない。例えば、大学の授業や部活動等にまったく関心がなく、学習態度も良くない学生を集めてPBLをやれば、全員が覚醒するかと問われれば、否定的に答えざるを得ない。そう考えると、PBL学習への参加者はある程度選抜される形がとれたほうが良い。

今回の第4次マイクロネシアPBLには京都の立命

館大学からオブザーバーとして7人の学生が参加した。選抜にあたっては学内で公募し、希望した学生全員に対して、参加動機のエッセイを書かせ、その上で面接を行って30人以上の中から7人を選抜した。しかし麗澤大学の場合は学生総数も少ないことから、口コミ情報や勧誘によって人数を確保した。

参加するための経済的負担がひとつのハードルになっていることは否めないが、今回からは大学からの奨学金が適用になり、個人負担は全体額の三分の一ほどであった。もっと学生たちの参加意欲を掻き立てる工夫が必要である。もっとも、但し書きとして麗澤型の人選方法（友引型の人選）もメリットはある。それは、PBL学習において極めて重要な要素にチームワークがあるからである。要するに、チームの仲間が仲良しでなければ、現地で過ごす濃い人間関係の中で、意見の食い違いから分裂してしまつては学習効果が半減してしまう。前向きな意見対立は寧ろ歓迎されるが、意見対立を通じてより良いアイデアが生まれることもある。その点では、麗澤

チームは良くまとまっていたと思う。

③事前学習と事後学習の重要性

PBLの特徴は体験型であることだ。実際に海外に行くことだけがPBLの売りの部分ではない。事実、ミクロネシアPBLは大学制度の中で「自主企画ゼミ」として単位認定されている。学生と教員は前期セメスター（15回の授業時間）で夏休みの現地活動の準備を行い、後期（同15回）では夏休みに行った活動の振り返りと取り纏めを行う。準備に関しては、過去に行った先輩たちの活動記録を見返して、改善点を見出し、必要な環境教育教材の作成を行う。

今回のチームでは、山梨県の清里にあるKEEP協会を訪問し、環境教育の実践論をKEEP協会の担当者から講義を受けた。合宿勉強会はチームの絆を強化するためにも大いに役立っている。後期セメスターでは活動記録と抽出された新たな気づきを報告書に纏め、学内報告会を必ず実施している。今年

度は、本学の創立者・廣池千九郎生誕150年記念事業の一環として、大学祭期間中に「若者がつくる太平洋の共生社会」というテーマで、学生目線でのシンポジウムを開催した。これらの事前と事後の学習を含めてPBL学習は組み立てられている。この1年間の学びを通じて、学生たちは考えて・実行する力を育んでいく。

④教員の役割

一言でいえば、大変なボランティア事業である。正規の担当授業ではないにもかかわらず、一度指導教員を引き受ければ相当な時間と労力を負わなければならない。PBLは完全なアウトプット型の学びの機会なので、学生たちの個々人の能力を把握したうえで、教員が前面に出過ぎることなく個性に合わせた課題の設定と役割分担をリードしてやらなければならない。また海外に出る際に、学生にはできない各種アポイントの取り付けや安全管理も全て指導教員が負うことになる。

今後、日本の高等教育現場でアクティブ・ラーニングやPBLが奨励されていくに違いないが、経験者として言えることは、何より重要なことは学生の教育以前に、大学教員がこれらの学びの機会の使い手（教育手法創造者）になれるように指導者育成研修の充実が図られなければならないと考える。現



ゴミの山（日本車の残骸）

在、麗澤大学の中でPBLを標榜する教員がグループを作って、事例研究に着手している。麗澤大学の校風と学生レベルに見合ったPBL学習手法が開発されることを望む。

⑤PBL学習効果の評価

PBLを推奨する者として最も重要な課題のひとつである。PBLが教育効果を向上させるものであるならば、PBLを通じて、学生たちがどう成長したかを客観的に量らなければならない。ミクロネシアに関しては、既に、4回の現地活動を行い、そのために4年間にわたる事前・事後学習を行ってきた。主観的な評価をすれば、学生たちの成長は著しい。しかし、それを定性的ではなく、定量的に証明しろと言われれば、現状では明確に示せるループバックは完成していない。これを教育研究的に追及することが自身の課題でもある。

まだ、現役で大学に残っている学生には、ミクロネシアPBLに参加する前の自分と参加した後の自

分についての学びに対するモチベーションのアップや語学の伸び（TOEIC等）についても学生たちの声を拾ってみたいと考えている。

⑥ PBL学習を定着化していくための大学体制

ミクロネシアPBLを通して見えてきた体制整備に関連する課題は、その都度大学側にも提案し、それなりに改善（支援）がされてきていると感じている。2015年に続き、今回の海外渡航にも国際交流センターに関わっている教員が参加し、今回はさらに事務系の職員も1名参加した。このことは、前項で記述したが、学内でPBLの有効性を実感した教職員を増やし、PBL学習を指導できる教職員を育成することに繋がるものと期待している。麗澤大学の様に規模の比較的小さな大学では、新たにPBLを指導できる専任の教員を新規採用することは難しいので、職員も巻き込んだ既存要員で対応可能な体制を考慮する必要がある。そのためには、事務の職制とは別に（教員については所属専攻とは別に）

フレキシブルにPBLに関われる制度を構築し、相應しいンセンティブを付与できる制度の整備を求めたい。

今回、オブザーバー参加した立命館大学の採用している「成長支援型奨学金制度」は学生たちのやる気を引き出すためのひとつのインセンティブとして考慮してみる価値はありそうである。

⑦ 所 感

現在、多くの大学ではアクティブ・ラーニングやPBLを取り込んでの実践型教育機会を充実させようと取り組んでいる。私が提唱したいのは、それらのアクティブ・ラーニングやPBLを1回限りのイベント型で実施することに留まらず、それらを4年間の教育カリキュラムに取り込む形でのプログラム型カリキュラムとしての編成である。

現在のような単に時間割的なカリキュラムでは、学生たちは自分たちのやりたいこと（学びたいこと）を見出せないまま学年を重ねてしまっている

ような気がする。その反面、ミクロネシアPBLやカンボジアPBL、ネパールPBL等に関わりだしている学生の中には、夏に行っている集中講義「青年海外協力隊訓練所体験入所」には結構多くの学生が参加しており、彼らはかなり明確な自身の進路を描いている。

一事例ではあるが、IEC学生で、2年次に中東研修に参加し、3年次〜4年次にはミクロネシアPBLに参加した学生が（4年次にはミクロネシアPBLのリーダーを務めた）青年海外協力隊に合格し、現在はミクロネシア連邦の環境局で、環境教育担当として活躍している。今回の現地活動中にも面会の機会を得たが、実に逞しく成長し、英語も流暢に使いこなして、既に、一人前の国際人になっていた。

一人だけの事例で以って、全てに適用することは無理があるのは承知している。しかし、一つの事例もなければ、現役の学生たちには自分たちにも描ける「夢」のひとつにはあがってこないだろう。

PBL学習を通じて、夢を実現できる可能性を学生たちに実感させていきたい。

〇〇〇〇〇

PBL型学習と出会って

浪野 愛子

（英語コミュニケーション専攻4年）



私は大学2年時からミクロネシアの環境問題解決に取り組むJapanesia団体に参加している。近年アクティブ・ラーニングが注目されているが、中でもPBL型学習を基盤とするのがこの団体の特徴だ。

我々はミクロネシアでのごみ問題を発見することから始め、解決に向けて環境教育プロジェクトを立て、必要な知識や情報は専門家の話や視察を通して収集した。ゼロから指導案を練り、教材や資料は全て自作し、実際にミクロネシアに行つて活動をした。

一般的な座学の講義型学習は学術的な知識を身につけることができる。しかし、せっかくインプット

したものをアウトプットできる機会が少ないことから私は物足りなさを感じていた。団体に加入しPBL型学習と出会って、私は従来と全く異なった学習法に驚いた。こんなにも「学ぶこと」に夢中になれたのは人生で初めてだったからだ。学習と活動を並行して重ねる度に効果を感じ、気付けば自発的に「学びたい」と思う姿勢が身についていた。PBL型学習の効果は確実であることから私はその魅力をより多くの学生、いやむしろ教育関係者に伝えたいと感じる。なぜなら指導教授である成瀬先生の役割が非常に重要で偉大なものであったからだ。彼は本当の父のように大きな愛をもって我々の成長を見守り続けてくれていた。忙しい中でも時間と労力を惜しまず学生のためにこんなにも一生懸命になり、時間を共に過ごしてくれる教員はそういない。成瀬先生はじめ、大切な仲間とミクロネシアの友達に出会えたことは私にとって生涯の宝物となった。

PBL型学習では学生が主体となってプロジェクトを進行する点が大きな特徴だ。私たちは活動にお

いて「一人ひとりがリーダーである」という意識を大切にしている。個々による積極的な学びと、チームへの主体的な参加姿勢が活動をよりよいものに導くからである。学年に関係なく仕事や役割を分担し、皆がそれぞれ責任をもつ。時にはペイントーク（お互いのマイナス点を遠慮なく話し合うこと）も必要とし、仲間同士の成長をも自身の喜びとした。こうして自主性やチームワークが磨かれ全員が成長できる環境が築かれた。

私はこの活動を通してグローバルな価値観を身に付けることができたと思う。相手と自分の「ものさし」は決して同じではなく、偏見の無い世界観を持つことが大切だと学んだ。直接体験から感じ、考え、学んだからこそ、心に響いた。想いを仲間と共有したから、本気で動くことができた。そしてそれは私を確実に成長させた。PBL型学習は、まさに「生きた学習法」だといえるだろう。

〇〇〇〇〇

ミクロネシア研修の経験を通して

岡田実夏

（英語コミュニケーション専攻4年）



私は約3年間、Japanesiaのメンバーとして、ミクロネシア連邦国ポンペイ島でのゴミ問題に焦点を当てた環境教育プロジェクトに関わってきた。今年度は3年で計画したプロジェクト実行の2年目になり、現地の小学校でワークショップを開き、子供たちと一緒にゴミ問題について考えた。

私たちの活動はPBL型学習といい、現地視察からプロジェクトの立案、そしてプロジェクト実行の過程があり、この団体自体は結成されてから4年が経つ。毎年、現地への渡航手配や旅程決め、関わる方々へのアポイントや活動内容を自分たちで考え決めていく。

今年度のワークショップのシナリオも自分たちで考え、教材を作成した。環境教育を考えることは決して簡単ではない。毎年のことだが、私たちは何度

も頭を抱え悩んだ。シナリオを作成する過程で、環境教育をするということの難しさを改めて実感した。子供たちにゴミ問題についてしっかり考えてもらい、行動に移してもらうにはどうしたらいいのか。私たちは何度も考え直し、最終的には自分たちが納得できるようなシナリオと環境教育教材ができたと思う。

現地での活動は約2週間である。私たちの協働実施者であるミクロネシア短期大学の学生たちと一緒に環境教育を行った。子供たちを相手にすべてがうまくいったというわけではなく、たくさんの反省点があった。しかしそれをみんなでまた考え修正し、活動最終日のワークショップは納得のいくものであった。

私の大学生活を振り返ると、この活動が一番の大きな経験である。このPBL型学習は、講義だけでは得られない学びがたくさんある。自分の目で見た問題を解決しようと計画を立て実行する。そして実行したものを評価し、また計画し直し実行する。こ

のサイクルのもとに学生主体で学べるのがPBL型学習の醍醐味だ。大学を飛び出し、現地で実際に活動し得たものは数知れない。私は活動してきた中で、良い結果を出すことも重要だが、活動そのものに意味があり、それを行う過程も重要であることを学んだ。うまくいかなかったこともたくさんあるが、それも貴重な学びであり、それを次にどう活かして活動していくかということが大切で、これも継続的に活動しないと得られないものである。このPBL型学習は、社会のあらゆる現場で役立つ人材を育てるために必要になると私は思う。学生の可能性を広げてあげるためにも、先生方には温かい手助けをお願いしたい。今後、PBL型学習が多くの学びの場でどう発展していくのが楽しみである。

〇〇〇〇〇

必要なことが学べたのではないかと思う。また、ミクロネシアという異国の地で活動を行う中で、その国の文化、価値観を体感することや、問題解決に向けて互いに協力していくことは、これから国際的な仕事を実際にやりたいという人にとって絶対に経験しておくべきものであると感じた。

また、この活動で外せないのは監督として「Japanesiaを見てきてくれた成瀬先生であり「プロジェクト」とはどういうものかを教えていただいた。活動がうまく進んでいないときには助言をいただき、その中で先生のやり方というのも学べたと思う。厳しいことはいろいろ言われたが、この活動をやって良かったと思えるのは、時に厳しく時に優しく見守ってくれた先生のお陰である。

この活動を通してぶつかる壁は多く、言葉の壁や、責任、時には意見が激しくぶつかり合うこともあった。しかし「難」のない道を進むと「無難」にはなるが、それでは面白くないと感じさせてくれたのはPBL型のこの活動を経験したからにある。聞

ミクロネシア研修 PBL型学習を経験して

久徳謙介

(経済学科4年)



私はミクロネシア研修に2年間携わり、大きく成長を実感することができた。大学3年からJapanesiaという団体に入り1年目はメンバーとして活動を行い、2年目はリーダーとして活動を引っ張っていく中で、「メンバー」と「リーダー」という二つの視点で活動に携われたことは私にとって非常にプラスになり、これからの「人生」を考えた上でも、この活動を通して得たものが大きく生きてくると思う。

この活動を通して私が感じたことは、机の上で行う勉強にPBL型学習のような実体験できるものが加われば、大変有効な「使える学び」に変わると実感した。一人ひとりが責任を負い、プロジェクトを遂行していく中で人の見方や判断能力、計画性、協調性など、社会で「使える人」となっていくために

もなく、卒業して社会に出るが、いつでも挑戦者の気持ちには忘れず、何事にも挑戦していきたい。これから大学の授業で、机の上だけでなく実際に体感できるPBL型学習が増えたらいいなと思う。ここでの経験を生かすも殺すも自分次第だということもこの活動を通して学べた。2年間だけであったがPBL型学習が体感でき、麗澤に来て良かったと思う。

〇〇〇〇〇

PBL型学習を通じて学んだこと

秋本麗汀

(国際交流・国際協力専攻3年)



大学1年生の冬からJapanesiaのメンバーとして活動した3年間の経験は、私の人生にとって大切な財産となった。PBL型学習を通じて得た最大の学びは、「失敗は成功のもと」という考え方だった。Japanesiaに入る前の私は、何事に対しても失敗することを恐れて、失敗することが恥だと昔から考え

ていた。そんな私にとってはとても大きな収穫だった。

Japanesiaの活動は現地の子供たちへの環境教育であるが、活動の実践の中で気が付いたことをベースにして毎年テーマを変え、そのテーマに合わせた新たな活動を行ってきた。2016年の活動のテーマは「理解を深める」ことだった。理解を深めるための環境教育の教材づくりの難しさや、活動の効果の指標の取り方など、あらゆる所で行き詰った。その都度、何度もメンバーと話し合いを重ねたことや練習を繰り返すことで、どうにか乗り越えることができた。苦境に直面した時に自分の無力さを凄く痛感し悩んだ。しかし、自分の欠点に向き合う時間があることや、欠点に気づかされることは日常をただ過ごしているだけでは気づけないことなので、Japanesiaとしての活動は人間的にも成長させてくれた機会が多くあった。困難なことがあったからこそ、自分たちが考えた環境教育を子供たちが理解してくれた嬉しさはとても大きかった。またPBL型

学習を進めていくことにおいて、学生が主体となって物事を運んでいくのは前提としてあるが教員というアドバイザーがいるからこそプロジェクトの目標が達成できた。

就職活動で「学生時代に一番頑張ったことは何か」と問われれば、真つ先に浮かぶのがJapanesiaでの活動である。Japanesiaに加入して3年、気が付けば自分が一番上の代となり4次隊は今まで以上に責任を感じた年でもあった。メンバーとして活動した3年間はあつという間で、もうすぐ終わってしまうかと思うととても寂しく感じる。すべての思い出が決して良い思い出でなく、辛いことも多くあつた3年間だったが、活動が終わることの寂しさを感じている今、自分にとってJapanesiaの存在の大きさが分かる。この活動を通じて得たものは多く、自分の心の中の変化もあつた。苦境に直面したからこそ感じたこと、気づけたことがあつたからだ。PBL型学習を学生時代に経験できてよかったと心から思う。

〈特集〉麗澤型PBL学習

カンボジア、0から始める国際協力

外国語学部講師 内尾 太一



私が、麗澤大学に着任した2015年のことです。大学院の博士課程で自身の研究に没頭していた頃から一転、新米教員として、一回りほど年齢の離れた大学生を指導することが生活の中心になりました。そして、最初の年から深く関わることになったのが、この記事の主役であるPlus+という学生のグループです。

外国語学部国際交流・国際協力専攻の1年生6人が、2014年にこのグループを結成しました。そして、2年生になった彼らは、「自主企画ゼミナール」という単位履修制度を利用して、カンボジアの小学校に通う子供たちとの交流計画を立て始めまし

た。これは、あくまで学生主体のゼミであり、担当教員はあくまで補佐役、その人選も自分たちで行います。結果、麗澤大学に、彼らよりも1年「後輩」として入ってきた私が、その指名を受けることになりました。

当時のメンバーは、男子1人、女子5人で、いささかジェンダーバランスに偏りがあるものの、互いに仲が良く、快活で積極的な学生ばかりでした。ゼミの雰囲気も毎回、活気に満ち、議論はときに脱線することはあっても、全員、カンボジアの子供との交流活動のための準備に真剣でした。

ただ、欠点を挙げるとすれば、彼らは、関心のあ

るテーマについてでも、書物を通じて知識を得る、ということにそれほど親しんでいませんでした。気持ちにはよく分かります、私も学生のときはそうでしたから。学生にとつての読書の重要性は、日々の指導の中で繰り返し強調することにして、ゼミとしては、カンボジアの国際協力や国際交流について、理解を深めるための別のアプローチをとることにしました。

ところで、読者の皆さんは、フジテレビ系列の長寿バラエティ番組『笑っていいとも』を覚えていますか。その中には、「テレフォンショッキング」という人気コーナーがありました。ほぼ毎日生放送で30年以上も続いていた同番組を、過去形で語る日が来るとは思ってもいませんでした、それはさておき、そのコーナーは、スタジオに招待されたゲストが、有名人のお友達に次のゲスト出演の依頼を電話で行う、というものでした。

このテレフォンショッキングから着想を得た学びの方法が、「インタビューリレー」です。学生ら

は、ある専門家のもとを訪ね、インタビューを行い、その方からまた別の専門家を次のインタビュー相手として紹介して頂く、というものです。そのねらいは、大きく分けて三つありました。

一つ目は、この方法を通じて、彼らの得意な部分を伸ばすことでした。専門書を「読む」ことが苦手な彼らでしたが、専門家の話を「聞く」ことは苦ではないどころか、わくわくすることのようでした。また、教室にじっと座って勉強することは敬遠しがちでしたが、その代わりに、学外で新たに人と出会うためにはフットワークの軽さを発揮していました。

二つ目は、彼らにとつて敬意を払うべき専門家の方々と接する過程で、社会人として必要なスキルを磨いていくことでした。例えば、インタビューを正式に依頼するにあたっては、電子メールでのやりとりが基本となりますが、適切な言葉づかいや、アポイントメントの取り方など、相手に対して失礼がないようにしなければなりません。また、実際に対面するときの挨拶の作法から、趣旨の説明、話を聞く

姿勢、質問をするときの態度なども、人間関係を築くうえで重要なことです。

そして、三つ目は、リレー方式の導入によって、専門家同士のネットワークの恩恵にあずかることでした。大学生だけでは、なかなかコンタクトの取りづらい相手でも、紹介をしていただけただけで、スムーズなやりとりが可能となりました。そして、二人目以降は、その紹介者の話題でインタビューの内容も膨らみます。私自身、専門家がおすすめる専門家とはどのような人なのか、ということに関心がありました。「えー！この人とあの人って友達だったの？」というテレフォンショッキングの企画のおもしろさにも通じています。

以上のような教育効果を期待して、インタビューリレーは始まりました。我々の至らなさをゆえに、思い通りにいかないことももちろんありましたが、インタビューに応じてくれた専門家の方々は皆、予想していた以上に親身になってアドバイスをくださいました。

おかげさまで、カンボジアで自分たちの交流プロジェクトを立ち上げようとしていた彼らは、個性溢れるその道の大先輩方から、ときに勇気づけられ、ときに意気消沈させられ、ときに発想の転換をもたせられ、またときには、初心に戻ることを求められもしました。

この記事では、毎回のインタビューの締めくくりに必ず尋ねていた、「カンボジアのために私たちにできることは何だと思えますか」という質問に対する答えの数々を、一緒に振り返っていきましょう。

音楽を使つての交流がいいんじゃないかな。音楽は国民性が出るから面白いし、何より言葉がなくても通じ合えるところがあるからね。文化交流って理解できないことを理解しようとする姿勢が大事だと思う。(心理学者 M先生)

何もないよ。しかしあなたたちの国際協力で世界は変えられないけれど、友達を作ることはできる

よ。これは相手に寄り添って気持ちや文化・生活・習慣を理解するのも十分な国際協力であるということ。(法学者 S先生)

細かい分野ならいろいろあるわよ！たとえば、本と本棚を各学校に配ること。今までに140校ほど学校を建設してきたけれど、20校くらいまだ行き渡っていないのよ。それには、6万円あれば配布することができるわ。(NPO法人代表 Wさん)

英語を勉強してください。あなたたち学生は学ぶことが仕事です。学者が使うような難しい英語は必要ないでしょうが、カンボジアの現状を世界に伝えたい、訴えたいのなら、ある程度の英語は不可欠です。今後、カンボジアも発展して、国際化は避けては通れない、英語教育はこれまで以上に大切になってくるでしょうね。(言語学者 N先生)

RSのように塩分などをとって脱水症状にならないようにしてあげて。(社会学者 G先生)

折り紙とかどうや。(大学職員 Kさん)

物の支援ではなく、心の支援をしてほしい。心に残るものをね。(画家 Hさん)

自分が感動したことを人に伝える。お世話になったこと、自分がしてもらって嬉しかったことを一方的でなく、その時のお返しをするように、他の人へ伝えていけばいいんじゃないかな。(国際協力団体職員 Yさん)

プノンペン大学で募金活動するのもいいかもよ。試験する前に募金している時もあるからね。お金を持っているカンボジア人は、カンボジアの子供たちにとって、活動している人のことが好きだから、やってみなよ。(日本在住カンボジア人 Pさん)

あまり難しく考えなくていいのよ。日本の文化、遊び、絵を教えるとかね。日本とカンボジアの違いを面白おかしく、楽しく教えていくのがいいと思うわ。(リサイクルショップ店主 Mさん)

子供たちの心に残るように一回一回の活動をスペシャルに、と心がけて行えば子供たちの中で特別な存在になれると思うの。一緒に遊んで、一緒に笑って、大学生らしくあなたたちらしく活動すれば絶対に喜んでくれるよ。(大学院博士課程 Kさん)

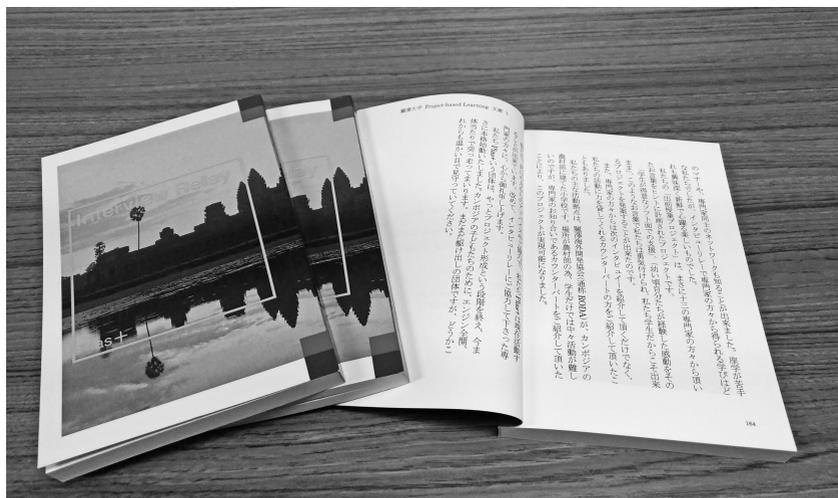
自分たちが楽しくないと意味がないんだ。やっていて楽しくなければその活動はやらないほうがいい。だから自分たちが犠牲にならない程度に、お互いが楽しく嬉しくなるような活動にしていってほしいんじゃないかな。(旅行業者 Hさん)

次にカンボジア行った時には、ストリートチルドレンに塩飴をあげな。下痢疾病が多い国では、O

体を使って体験させて印象に残すことが大切です。例えば、運動会を通して、チームワークの大切さや勝ち負けというものを知ってもらうなどです。他にも、絵を描かせるのも子供たちに色々考えさせることができます。絵を描かせるなら、その絵を通して、子供たちに社会の様々なことを想像させてほしいです。(カンボジア人の大学教員 L先生)

このような、かけがえない出会いと学びが詰まった13のインタビューは、学生ら自身の手で文字に書き起こされ、文庫本サイズの報告書にまとめられました。その文章チェックを含む編集作業こそ、ゼミ担当教員としての最も重要な仕事となりました。そして、インタビュー協力者の方々には、御礼とともに報告書を渡すことができました。

とはいえ、このインタビューリレーは、Plus+の活動の一部に過ぎません。「自主企画ゼミナール」



学生のインタビュー報告書

1年目に着手したこの取り組みを、まずは私から紹介させて頂きました。ここからの記事の後半部分は、学生たち自身の言葉で、語ってもらいます。

〇〇〇〇〇

Plus十七世……

村瀬 朱里

(国際交流・国際協力専攻4年)

私は外国語学部IEC専攻4年、カンボジア国際協力団体Plus+の代表、村瀬朱里です。Plus+とは、2014年にIEC専攻6人の学生で立ち上げた国際協力活動を展開する学生団体です。現在は4年生6人、2年生4人の計10人で活動しています。この団体名は“Present love to all students”の頭文字を取ったもので、「私たちが関わる全ての子どもたちに愛をもって接したい」という意味が込められています。

結成のきっかけは「僕たちは世界を変えることが

できない」という1本の映画。この映画に感化され、国際協力の「こ」の字も知らない私たちが「私たちも何かしたい!」と動き出しました。

私たちPlus+は、今年で団体結成から4年目を迎え、初期メンバーである私を含む4年生はもうすぐ引退です。これまでPlus+を支えてくださった沢山の方々にお礼の気持ちを込めて、卒業まで日々精進して参ります。

〇〇〇〇〇

カンボジアについて

大塚 桃香

(国際交流・国際協力専攻4年)

まずはカンボジアの概要について説明します。カンボジアはタイ、ベトナム、ラオスの間の東南アジアに位置する国です。首都はプノンペンで、人口は日本人口の10分の1ほどの約1600万人となっています。面積は日本の半分ほどで約18万km²です。公

用語はクメール語と呼ばれるカンボジア独特の言葉が使われています。現在、都市部の方では日系企業の進出による開発の影響や観光客増加により、英語が通じるところがほとんどです。主要産業は農業・縫製業・建設業・観光業となっていて、一人当たりの国内総所得は950米ドルとなっています。

このようなカンボジアですが、過去には信じがたいジェノサイドがありました。カンボジアは1953年にフランスから完全独立し、シアヌークが国王になり、平和な時代を送っていたものの、ポル・ポト政権時代になると極端な共産主義政策を進められ、それに反発する人たちが次々に処刑されました。その数はなんと約300万人とも言われています。内戦時に埋められた地雷は約400万個と言われています。このような時代を経て、1993年に新憲法を發布して立憲君主国になり、現在のカンボジアとなりました。

この出来事は国旗にも示されており、青色は王室の権威、赤色は国民の忠誠心、白色は仏教を象徴し

ています。中央に描かれた建物は世界遺産のアンコールワット遺跡です。

(参考『データブックオブ・ザ・ワールド』2016年版「カンボジア王国」二宮書店)

〇〇〇〇〇

カンボジアの小学校について

市川舞夏

(国際交流・国際協力専攻4年)

次に、カンボジアの小学校について紹介します。

皆さんはカンボジアと聞くと、どんなイメージを持ちますか？ きっと多くの方がカンボジアは「貧しい」というイメージを持っていると思います。でも、決してそんなことはないんです！ 街は活気に溢れ、大きな生命力を感じることが出来る国なんです。それは街だけでなく小学校の中でも見る事ができます。

小学校は2部制で、午前と午後に分かれて子供た

ちが授業を受けています。この体制は、教師や教室が不足していることが原因ですが、その中でも子供たちは積極的に授業を受けています。午前の部の子供たちは、なんと7時から授業を受けているんです！ そして、公立の小学校に通う子供たちは決められた制服を着ています。上は白のワイシャツ、下は紺のパンツ／スカートです。これらは実際に私たちが活動を通して見てきたものであり、拠点となっている農村部の小学校でも同じことが言えます。

〇〇〇〇〇

出前授業について

森田遼太郎

(国際交流・国際協力専攻4年)

私たちの活動地の1つにトム・オー小学校があります。ここでは生徒数200人ほどに対して、先生が総勢4名で全授業を担当するという現状があります。このような状況は、多くの農村部の学校に共通

しています。2015年から続けているインタビューリレーで得たアドバイスを基に、学生らしい活動として出前授業を考案しました。コンセプトは小学校を訪問した際に先生のお手伝いをするということです。

実際に2016年3月、現4年生のメンバーがそ



れぞれ1教科を担当し、全3校で「出前授業」を実施しました。教科は理科・言語・交通安全・体育・日本文化・夢です。カンボジアでは情操教育があまり普及していません。しかし、そういった主要科目以外の教科こそが重要と考え、この6教科を選びました。理科ではスライム実験やシャボン玉実験、言語では日本語の挨拶や習字の紹介、交通安全では交通ルールについて〇×クイズ形式で学びました。体育では日本のような紅白で行う運動会、日本文化では着物を着て登場し、四季を紹介しました。最後に、夢では自分の将来を想像して絵を描いてもらいました。これからも出前授業を通して子どもたちに新しいことへのわくわく感と楽しい時間を届けたいと思います。

〇〇〇〇〇

飛び出し坊やについて

大久保佳織

(国際交流・国際協力専攻4年)

私たちは現地調査を含む計3度の渡航を経て、現地の問題とニーズを知ることができました。現地で先生から、小学校の周りでは大変な交通量にもかかわらず交通安全の意識が低いこと、そして、小学校は子どもの安全の為にレンガ作りの塀が必要だということでした。

そのニーズに応えるために、塀作りはもろろんのこと、交通安全に対する内面的なサポートを何か出来ないかと考えた末、滋賀県発祥の「飛び出し坊や」という交通事故の軽減に効果のある看板設置をすることに行き着きました。そして、活動の中で「飛び出し坊や」を使用するために滋賀県へ向かいました。そこで「飛び出し坊や」の考案者に使用許可を得ることができました。さらに社会福祉協議会の方にインタビューを行い、滋賀県での「飛び出し

坊や」の効果や、地域住民に愛されているなどの存在意義についてお話し頂きました。私たちはこれからカンボジアでも愛される「お宝」+なりの「飛び出し坊や」を考えていきたいと思っています。

〇〇〇〇〇

宮城県南三陸町での研修

安部和佳奈・谷内うらら

(国際交流・国際協力専攻2年)

私たちはカンボジアだけではなく国内での活動も積極的に行っています。この夏、内尾先生からの紹介で、東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町へ訪れました。南三陸町での活動は2015年の夏から続けていて、現地では、防災対策庁舎の見学、仮設住宅訪問、被災体験の傾聴、南三陸町に古くから伝わっているキリコという紙細工に挑戦など、多くの貴重な体験をしました。

一番の目的は「学び場つばき」という地元学習塾

での出前授業です。そこで小学生たちとその保護者の方々に麗澤大学の紹介や、私たちの活動地域であるカンボジアの良さを知ってもらうためです。クメール語クイズや〇×クイズでは、子供たちの笑顔が見られ、カンボジアと日本の違いに興味津々だったことがとても印象に残っています。

海外のことについて学ぶことの多い私たちですが、現地では、日本の美しさや素晴らしさを身近に感じる事ができました。今回体験させていただいた素敵な文化を大切にして、国内だけでなく海外にも魅力を伝えていきたいです。また被災地の復興に少しでも貢献できたらと思っています。

〇〇〇〇〇

順天高校訪問について

小田嶋優花・小川龍星

(国際交流・国際協力専攻2年)

国内では、インタビューリレーや南三陸町での出

前授業を行っている私たちですが、2016年11月、新たなチャレンジをしました。それは、文部科学省よりSGH (Super Global High School) に認定されている順天高校で、出張講義を行ったことです。

今回の授業で私たちが掲げたテーマは「How to 国際協力」世界は君のチャレンジを待っている」です。順天高校の生徒たちは、真剣に私たちの話に耳を傾けてくれました。相互に学び合う時間を過ごすことができ、私たちも成長できたと感じます。特に「スレイクオイの学び」というカンボジアと日本の違いを学ぶゲームでは、皆、夢中になって楽しく議論をすることができました。答え合わせをした際には、意外な事実にとっても驚いていました。90分という短い時間ではありましたが、その国に対する固定概念や偏見にとらわれない大切さと、学生だからこそできる国際協力の仕方を伝えられた気がします。

〇〇〇〇〇



おわりに

宮崎 杏

(国際交流・国際協力専攻4年)

2017年4月を迎えて、私たちPlus+は結成して4年目となります。麗澤が建設に携わったトム・オー小学校での出前授業や交通安全教育の活動は、今始まったばかりです。これからはIEC専攻の2年生が主体となって活動を展開していきます。学生だけで、現地のニーズに沿った活動ができる体験は、他になかなかできません！

麗大生の皆さん、Plus+と一緒に、世界へ飛び立ちませんか？ 学部や専攻は問いません。メンバー全員でお待ちしております。'Present love to all students.' をモットーに、カンボジアの子どもたちへ愛を届けましょう！

〈特集〉 麗澤型PBL学習

学生の主体性が生んだ「ネパールPBL型学習」

外国語学部教授 梅田 徹



PBL型学習に対する関心が急速に高まってきているが、PBL型学習とは何か、どのように進めるかについて雛型のようなものがあるわけではない。本学において展開されている、「PBL型学習」として括られる授業の多くも、試行錯誤しながら展開されるようなところが多分にあるように思われる。本稿で紹介する「ネパールPBL型学習」もその例外ではない。というより、むしろ、その典型であると言ええる。

自主企画ゼミの立ち上げ

始まりは何であったのか。海外で何かプロジェクト

トを立ち上げたいという強い希望を持った学生グループ（彼らはすでに「G9」を名乗っていた）から、自主企画ゼミを立ち上げたいので担当教員になってほしいと相談されたのが、私の関与の始まりであった。G9は、秋田県北秋田市荒瀬地区という「限界集落」において夏期休暇と冬期休暇に、それぞれ何日間か宿泊して現地の人たちと交流し、あるいはボランティア活動を、すでに展開していた。その活動も、2015年度のプロジェクト・プラスで最優秀賞を獲得するなど、傍から見ればそれなりに成果を上げているように見えた。それでも、彼らは、次は海外で何らかのプロジェクトを展開したいと考える

ようになっていた。そこで、私のところにやってきた。

この段階では、どの外国でプロジェクトを展開するのか決まっていなかった。候補地としては、バングラデシュ、ミャンマー、ラオスなどがあった。私も若干の意見を述べたりしたが、彼らは、最終的にネパールに決めた。ネパールは、2015年4月に大規模な地震に見舞われていた。同年夏ごろには、復興は進みつつあったが、その速度は鈍かった。震災後のネパールに関して自分たちに何かできることがあるのではないかとということであった。私自身は、ネパールの専門家ではないが、国際法が専門で、国際関係や国際政治には相対的に通じているということ、学生たちが持ってきたネパールで展開する自主企画ゼミの担当教員の役目を引き受けることにした。2015年度第2学期に開講する自主企画ゼミの一つとして新たに申請し、正式に承認された。

自主企画ゼミは、カリキュラムの一覧表には載っ

私は基本的に学生の主体性に任せていたが、一度だけ「ストップをかけた」ことがあった。彼らは、ネパールの復興において自分たちに何ができるかについて検討する中で、麻袋に土を詰めて土嚢を作り、それによって途上国の穴だらけの道を補修する活動を展開している日本の団体があるという情報を共有し、これなら自分たちでできるということで、その方向で準備し始めた。現地で実施する前に国内で実際に一度やってみる必要があるという。成田市近郊に借りられそうな田んぼがある。よし、そこに手紙を書いて、許可をもらおう。ということ、手紙の文面まで用意してきた。どの段階でストップをかければよいのか、私は決めかねていた。ひよっとしたら彼らの中から、この計画は無理ではないかという意見が出てくるのを期待していたからである。しかし、いくら待っていても出てくる気配はなかった。そこで、ある段階で、私のほうから次のように切り出した。

「考えてみてほしい。君たちはまだ現地の状況を

ているが、時間割上には記載されていない。参加する学生と担当教員との間で相談し都合の良い時間帯で落ち着くことになる。ネパールの自主企画ゼミは、金曜日の4時限目に設定された。ネパールの専門家は誰もいない。学生らは、ネパールの地理、政治、宗教、教育制度、観光資源、震災後の復興などのテーマを選定し、各自に割り当てて、それぞれ調べてきた内容をプレゼンテーション形式で報告し合うことによってネパールについて学習する方式で進めた。こうした相互の学び合いのプロセスは、比較的うまくいったと考えている。私自身も、ネパールの歴史や政治、宗教について知らないことが多く、率直に言って大いに勉強になった。

主体性の尊重

授業の内容さえも、教員の側ではなく、学生側に主体性がある。主体性が認められるところに責任感も意識されるのであろう。学生たちは実に生き生きとして授業に臨んでいた。

自分の目で見ていないのだ。仮に現地の道路事情が悪くて補修の必要があるにしても、現地の人たちがそれを望んでいるかどうか確認しないでやるというのはどうだろうか？」と。

何かをするにしても、まずは現地の状況を自分たちの目で実際に確かめることが大切である旨を伝えられた。その結果、土嚢による道路補修の計画は見送られることになった。

現地とのコンタクト

ネパールについての学習を進める傍ら、彼らは自分たちでツアーの実施を企画していった。現地のいくつかの機関や団体に対しても自分たちでアプローチした。JICA（国際協力機構）のネパール事務所にも自分たちでコンタクトをとって訪問のアンケートをとった。しかし、震災が発生してからまだ数か月しか経っていなかった当時のネパールではインターネットの接続状況は芳しくなかったが、国立のトリバン大学訪問を計画し、何度かコンタクトを

試みたものの、返事が来なかった（最終的には同大学のキャンパスは訪問することができたそうだ）。そんな状況を見て、私は、Transparency International (TI) というグローバルな腐敗防止に取り組んでいるNGO団体を紹介した。私は、2005年から2013年までTIの運動に関わっていた関係で面識があり、国際的な集まりでも何度か話したことがあったネパールの支部代表者を紹介した。彼からは比較的すぐにOKの返事が来た。

私のほうからもう一つ紹介したのが、麗澤海外開発協会(RODA)である。RODAの木下廣太郎理事を訪問したのは、学生たちの計画がかなり進んだ段階になってからであった。早い段階で紹介すると学生の自主性が損なわれるかもしれないの思いもあった。木下理事およびRODAには、情報の提供ならびに現地でのネットワークの利用、人的支援等で学生たちはたいへんお世話になった。訪問校としてシタパイラ村の小学校を紹介してもらったのも、RODAを通じてであった。学生たちの意欲は

RODAからの経済的支援を引き出すことにもつながった。また、現在でも、現地のRODAの人的ネットワークに頼っている部分はかなりある。RODAの支援がなかったならば、学生たちが充実したネパール研修旅行が実施できたかどうか分らない。

1回目の研修旅行

自主企画ゼミの最後の授業は1月中旬に終わった。それから1カ月ほどたった2016年2月16日、9名の学生のうちの4名がネパールに向けて出発した。そこで11日間、彼らはネパールでの研修を通じて、見聞を広め、2月26日に帰国した。機中泊が含まれるので、現地のホテルには9泊したことになる。ホテルもネットで探し出したもので、1週間、4名で連泊し日本円に換算して1万5千円ぐらいのホテルである。そんな安ホテルで大丈夫なのか、心配していたが、彼らにとっては「快適な」宿泊施設であったようだ。

学生たちが帰国後にまとめた報告書によると、現

地での活動は大きく分けて三つあった。一つは、ボランティア活動、二つ目は現地で活動する団体訪問、三つ目は被災地における被災状況の視察である。彼らは、首都のカトマンズ市内の比較的外国人が多いタメル地区に宿をとっていたが、そこから車で30分ほどの所に位置する二つの初等中等学校を訪問した。ここでは、現地の小・中学生たちに対して、紙芝居を使って日本文化を紹介する授業を行った。授業は英語で行い、現地スタッフにネパール語で補足してもらった。ある学校では、仮設校舎が使われており、その校舎のペンキ塗りに現地の先生や生徒たちと一緒に取り組んだ。

現地で活動する団体訪問は、日本からアポイントをとっていた二つの団体である。TIのネパール支部(TI-Nepal)とJICAのネパール事務所である。TI-Nepalは、同国にはびこる政治家の汚職や政府の透明性欠如等の問題についてブリーフィングを受けた後、質疑と意見交換を行った。震災後の復興が進まない背景にはこのような腐敗の問題がある

ことに気づくことができたようだ。JICA事務所では、防災エキスパートとして活動する人ともう一人、NGOデスクの二人の日本人から話を聞いた。震災復興やネパール社会の動き、ネパール事務所の対応や活動について話を聞くことで、日本の国際協力的一端に触れることができ、有意義であったと書いている。

被災の現状

三つ目の被災地視察として訪れた場所には、スワヤンプナート、ダルバール広場、バクタブル、パシユパティナート、カトマンズ市街、そして、トリバン大学が含まれた。トリバン大学は、日本から関係者へのコンタクトを試みたが、結局連絡がつかなかったが、現地入りしてからアクセスして、キャンプ訪問と図書館の見学が許された。学生たちが現地で撮影したかなりの枚数の写真が物語るのは、2015年4月に発生した大地震が首都の街並み、とりわけ世界遺産のバクタブル寺院の破壊の程度が

激しく、修復にもかなりの歳月と費用がかかりそう
だという事実である。震災の被害の大きさと復興が
進んでいない状況を目の当たりにした学生たちの心
には、さまざまな思いがよぎったに違いない。その
中でも、とりわけ自分たちのような日本から来た学
生には、何ができるのか、という思いではなかつた
のではなからうか。一つはつきりと言えることは、
「百聞は一見に如かず」である。現地に足を運ばな
くても分かることはたくさんあるが、また一方で、
足を運んでみないと分からないことも、また同じく
らい、あるいはそれ以上にあるということであろう。

帰国後の議論

第一回目の渡航は、ネパールの状況に対して自分
たちに何ができるのかという思いを強めたにちがひ
ない。帰国後の彼らの議論は、自分たちに何ができ
るのかに集中した。自主企画ゼミという枠組みは利
用しなかったが、その後も学生たちは、自分たちだ
けで定期的に集まって議論を続けていた。議論の様

子は、学内のグリーン・コミュニティ、通称「グリ
コミ」に設けられた「コミュニティ」にアップされ
る議事録を見れば分かった。

彼らによれば、現地でニーズ調査を実施した結
果、「震災発生時の対応が分からなかった」「現地の
NGOによる減災教育活動は存在するが、広く行き
渡っていない」ということが分かった。この結果を
もとに議論を重ねた結果、現地の小学生や中学生に
対して、発災時にどう行動すべきかについての知識
や心構えを共有することを目的として、現地の学校
でワークショップ形式の授業を展開する方向性が見
えてきた。つまり、現地で展開するNGOがやって
いる「減災教育活動」に注目したのである。減災教
育活動を実施すべく、夏期休暇中に再度、ネパール
に渡ることが決まった。自主企画ゼミの段階から関
与してきた私としても、夏期休暇中であるからスケ
ジュールさえ合えば、同行するつもりでいた。しか
し、そのスケジュール調整が難航した。渡航スケジ
ュールを決めるにあたって優先すべきは、現地でお

世話になるRODAのスタッフのスケジュールであ
った。現地スケジュールに合わせると、8月内の実
施は無理で、どうしても9月に入ってからの実施に
なる。私のほうは、9月では抜けられない予定が複
数あるため、参加が難しかった。その結果、同行が
きなかった。



麗澤大学で募集した筆記用具など支援物資を寄付

ネパールへの再渡航

2回目の渡航の計画が練られた。最初の渡航で、
学生たちは、シタパイラ初等中学校を訪問した際
に、生徒たちの中には、貧困のために筆記用具が買
えず、また、筆記用具がないために授業について行
けない生徒が少なからずいる事実を知った。彼らに
少しでも勉強の楽しさを知ってもらいたいという思
いから、学生グループG9は、使っていない鉛筆、
ノート、消しゴム等の文具の提供を学内で呼びかけ
た。2カ月ほどの募集期間中に鉛筆が約900本、
色鉛筆が60本、ノートが約60冊、消しゴムが約50
個、集まった。そのほか、クレヨン、ボールペン、
ペンケースなども集まった。集まった文具を支援物
資として届けることも、2回目の渡航の目的の一つ
であった。

ネパール再渡航は、2016年9月5日から10日
にかけて実施された。今回は、3名の学生が参加し
た。うち2名は初めての参加である。5日の出発



ネパール・バグマティ県シタパイラ村に位置する小中一貫校Shree Sitapaila Higher Secondary Schoolを訪問し、中学生を対象とした防災教育を実施

は、羽田発の深夜便であった。参加できなかったことに對する、せめてもの償いという気持ちもあって、私は羽田空港に3人の見送りに行った。2回目でもあること、学生たちの自主性に任せていたこともあって、あまり細かなところまで口をはさまないようにしていたが、空港に着いてから、海外旅行保険に入っていないということが分かり、空港内の保険会社の窓口で保険を購入する一コマもあった。3人は、前日も訪問したシタパイラ初中等教育学校を訪問した。学生たちは、2回目の渡航に向けて、日本文化交流を行う準備をしていた。メインの出し物は、童話「桃太郎」の読み聞かせで、その準備にも力を入れていた。本学の経済学部留学していたネパール人留学生からは、それまでもネパールに関する情報を得ていたが、今度は、彼に、「桃太郎」の読み聞かせ原稿をネパール語に翻訳してもらい、それを渡航前に練習しておいたのである。その読み聞かせは大変うまくいったようである。

次に、彼らは、「防災教育のワークショップ」を

実施した。具体的には、非常時に何を持ち出すかを生徒たちに意識させ、あるいは、仮想マップを使ってどこに避難すればよいかという問題意識を植え付けようとした。一つのクラスでの取り組みであったが、先生からは、次の機会には全部のクラスでもやってほしいとの依頼を受けたと聞いている。また、学内で集めた文具は、現地で手渡された(写真)。学生たちは、次の渡航を視野に入れてすでに準備を開始している。

学習の成果と課題

自主企画ゼミの立ち上げからスタートした「ネパールPBL型学習」では、学生の主体性がうまく発揮されたようだ。自主企画ゼミを担当した私自身も、できるかぎり学生の自主性を尊重することを心がけた。1学期間のゼミ形式で学習が終わった後でも、学生たちは放課後や昼休みに集まって旅行の計画を立てたり、現地の学校で展開する授業の準備をしたり、報告会の準備をしたりしていた。その過程

では、いろいろな人の助けを借りている。とりわけ麗澤海外開発協会のネットワークを通じてネパール現地における学校訪問や移動などさまざまな支援、援助をいただいた。学生たちだけでネットワークを構築するには限界がある。現地の受け入れ側のサポートは必要不可欠である。

もう一点、指摘しておきたいのは、学生の活動内容に関することである。学生たちが行動できる範囲と内容には自ずと限界がある。ネパールを選んだ学生たちは、試行錯誤の末、現地の小学校で「防災(減災)教育」を展開することで落ち着いた。ミクロネシアのグループは環境教育、カンボジアのグループでは交通安全教育に活路を見出した。小学校を訪問して、現地の子供たちと文化交流をしつつ、それプラス何かとしての「〇〇教育」が海外における学生のPBL実践の一つのパターンとして定着しつつあるように思われる。学生にとってもとっつきやすく、また、それなりに成果を実感できるというメリットがありそうである。



入学式 (2016.4.2)



別科日本語研修課程秋入学・特別聴講生開講式 (2016.9.13)



留学生歓迎懇親会 (2016.4.22)



第53回麗陵祭 テーマ：ハレルヤ (2016.11.3～5)



留学フェア (2016.6.23)



Japanesia 第4次隊「ミクロネシア研修」(2016.8.22～9.4)



第6期・麗澤模擬国連団体が「全米模擬国連大会」の〈国際原子力機関〉で初受賞 (2016.11.11～13)



荒谷友碩さん「第1回武術ワールドカップ」の太極剣で金メダル獲得 (2016.11.18～20)



鈴木結さん「2016JAL中国語スピーチコンテスト」で優勝 (2016.12.10)

観光は現場から

——フィールドでの学び

外国語学部教授 山川和彦



はじめに

東京オリンピックが決定して、日本社会は「観光バブル」と言ってもいいほどに、観光という言葉が毎日見聞きします。観光先進国という表現も使われています。2003年、小泉純一郎首相が施政方針演説の中で、観光の振興に言及し、当時約500万人であった訪日外国人旅行者の数を2010年に倍増すると述べました。それから14年が経過し、目標値は2020年に4000万人となりました。日本人の海外旅行者が減少するなか、今や、観光と言えば「インバウンド」、外国からの旅行者を意味す

る時代になったのです。外国人旅行者の急増は、当然のことながら、さまざまな影響を及ぼします。私は、このような状況の中で、観光と言語に関連するテーマを研究しています。以下、日本の観光事情に言及しながら、私と学生が行ってきた観光関連分野の学びを紹介します。

観光を取り巻く状況

外国人旅行者に人気の観光地というと、「ゴールデンルート」という表現が出てきます。東京から富士山を見て関西に抜けるルートです。最近では中部北陸地方の「昇龍道」(ドラゴンルート)という広域観

光圏もよく耳にします。その一方で、観光地ではなく、日本人もよく知らないようなお店に突如として外国人が並び出すということも珍しくありません。SNSの情報発信でブームになるわけです。このほかにも趣味で移動する人もいます。日本人でもサッカーを見るためだけにブラジルに行くファンがいるのと同じです。このように、観光施設を回るだけが観光ではない時代が来ているのです。

ところで、訪日外国人4000万人を実現するためには、東京などの都市圏だけではなく、地方に外国人旅行者を分散させなければなりません。今まで外国人旅行者とは無縁だったところが、外国人の受け入れてでてこ舞いといった言い過ぎではないでしょう。言葉よりは生活習慣の違う人たちの行動様式を理解するのが一苦労のようです。

私の研究と取り組み

日本の観光事情が何となく分かったところで、今度私が取り組んでいることを紹介します。私は授

業の初めにこういいます。「観光は現場だ」。教室で観光の話を聞くのもいいですが、「あるく・みる・きく」、汗をかいて学んだことこそが、自分の力になるという考えです。ですから私と学生の学びはまず観光地に行き、自分なりに何かを感じることから始めます。行政機関から情報を得るだけではなく、地域の人々と話し、観光客の様子を観察し、インタビューすることも多くあります。

では、私がフィールド(調査地)としている地点を北からごく簡単に紹介してみましよう。オホーツク海に面した北海道枝幸町。この町の歌登はタイ人旅行者が大挙して来たということとでマスコミでも大きく取り上げられました。日本一の毛ガニの水揚げ港ですが、町にある博物館を訪れるとオホーツク文化のロマンを感じます。学生と一緒にこれを観光資源にできないか考察しているところです。

次に、札幌郊外にある新篠津村。これも冬場、タイ人が雪遊びに来ていました。札幌から1時間、都市郊外のグリーンツーリズムの可能性を農家の方と

考えています。北海道というスキーのイメージがありますが、外国人スキーヤーの増加で有名なニセコ圏に通い始めてもう8年が経ちます。街中の看板の変化を見るだけでも地域の変容が見えてきます。大学のある千葉県でも研究と活動を始めました。このことについては後程触れます。一気に南に下って沖縄県石垣市。台湾からのクルーズ船が毎週寄港することに着目して、本学の中国語専攻の温琳先生や他大学の先生方と一緒に3年間共同研究をしたことをきっかけに、今も教育的な視点で活動をしています。

私の研究は、このようなフィールドで、外国人旅行者を受け入れるためにどのような施策が行われているのか、そしてその人々がどのように外国人旅行者を接遇しているのか、困ったことはないのか、外国人旅行者はどのように感じているのかなどを調べているわけです。

最近では「やさしい日本語ツアーリズム研究」にも関わっています。「外国人旅行者が増えた！ 英語

や中国語などを勉強しないと……」と思っても、なかなか外国語を勉強する時間がないのも現実です。そこで日本語を使って接遇できないかという研究です。日本にやってくる外国人の中には、日常生活圏とは異なる日本文化に興味を持って、日本語を少し勉強してきている人もいます。そういう旅行者は日本語で日本人と接してみたいわけですから、いきなり英語で話しかけられては興ざめということにもなりかねません。

観光の学びとPBL

観光分野の教育に関して、私が行っていることは、インターシップです。先に書いたように地方では観光人材育成が急務です。そこで学生をインターシップとして派遣し、観光の現場を学ぶと同時に地域に貢献してもらおう取り組みをしています。北海道の枝幸町には3年前から、石垣島には2年前から学生を派遣しました。インターシップは日本人学生ばかりではありません。留学生も参加します。



教室での日本語学習を終えて、日本人と一緒に職業経験を持つことは重要です。現場に出ることで、いろいろな学びがあります。

昨年行った一つのプロジェクトは、石垣市にある八重山商工高校の観光コースの生徒と本学の学生とのコラボ授業です。高校生にとっては外国人旅行者に話しかけるのはかなりハードルが高いようです。そのハードルを少しでも下げるために大学生が協力するというプロジェクトでした。本学ドイツ語・ドイツ文化専攻の草本晶先生にも協力してもらい4日間にわたって5名の学生・大学院生が高校で活動しました。生徒の反応は上々で、参加した学生たちは教えることの難しさを実感したようです。

地元千葉県での活動

千葉県には成田国際空港があり世界的な観光施設もあることで、多くの観光客が来ています。では、柏市はどうでしょう。授業で聞くと柏に観光客は来ないという答えが大半です。そのような中で大学の

地域連携センターの砂川亜里沙専門職員と一緒に「かしわ市民大学」を行ってきました。簡単に言えば訪日外国人旅行者を柏に呼ぶ取り組みを考え、実践していく講座です。参加者の熱意と気づきを見ているうちに、柏でも観光資源を創出することができるといふ確信を得ました。そこでの学びを、今度は大学の授業にも取り入れていきたいと考えています。観光というキーワードで、学生、地域住民、自治体、企業が連動していくプロジェクトです。まだ構想の段階ですが、2017年度中には実働していきたいと思います。

さらに、成田の隣、栄町にある体験型の博物館「房総の村」にも日本人学生と留学生とで訪問しました。外国人来場者が増える中で、どのような対応ができるか、博物館、教員、学生が一緒になって協議していくプロジェクトを始める予定です。

おわりに

外国人に限らず、観光客は人それぞれに興味や嗜

好が違います。したがって観光に従事する人は、いろいろなことに興味を持ち、「引き出し」を増やしておくことが必要です。その意味で観光の学びは、雑学かもしれません。それからもう一つ。本当は最初に触れなければいけなかったのかもしれませんが、観光は平和な社会で、日常生活に余裕がある人に見られる行動です。テロや戦争が起きれば観光客はつきめんに減少します。国際情勢の学びは極めて重要です。

初めに書いたように、今や時代は訪日外国人の増加で「観光バブル」状態ですが、麗澤で観光を学ぶ学生には、地域に根差し、主体的に誰とでもチームを組んで活動できる人材になってもらいたいと思っています。観光に関連する授業が国際交流・国際協力専攻の枠組みで開講されているのも、そのような視点があつてのことです。

〇〇〇〇〇

枝幸町の魅力に惹かれて

香川 唯



(国際交流・国際協力専攻3年)

私が北海道・枝幸町^{えさし}に興味を持ったきっかけは、2014年第2学期の山川和彦先生の「観光学」の授業で観たある映像だ。その映像では、枝幸町の歌登にあるホテルに大勢のタイ人が訪問し、そのホテルでの滞在を楽しんでいた。ホテルに辿り着くには長時間かかり、しかも訪ねていた時期は極寒の冬だった。彼らがホテルに足を運ぶ理由は、ホテルの従業員による心のこもったおもてなしと日本らしさを感じられるイベントに魅了されたからだ。

私はその映像を観て、実際に枝幸町を訪ねることを決め、2015年の6月に現地を訪ねた。滞在はわずか1日ととても短かったが、枝幸町の3つの魅力を発見した。それは酪農と漁業、そしてオホーツク文化だ。北海道ならではの酪農風景や日本一の水揚げ量を誇る毛ガニ、いまだ謎に包まれたオホーツク

ク文化など、たくさん魅力を感じた。しかし6月の滞在は短すぎた為、8月にもう一度訪問をし、6月に発見した3つの魅力の追調査をした。8月の訪問では4日間滞在をし、枝幸町役場の方には滞在中大変お世話になった。

一つ目の魅力「酪農」では、牛舎の見学とともに酪農家の方に直接お話を聞くことができた。普段全く関わりのない酪農であったが、実に分かりやすく説明してくださり、私からの質問にも親切に答えてくださった。そのお話の中で、私が1つ残念に思ったことは、現在枝幸町で採れた牛乳を町内で消化することが難しいということだ。隣町では小学校の給食に町内で生産された牛乳を使用する取り組みを行っているそうだが、枝幸町で生産された牛乳を、是非とも一度は枝幸町で飲んでみたいものだ。

二つ目の魅力「漁業」では、枝幸町観光協会で見学推進普及員を務めている方に枝幸町名産の毛ガニや鮭、ホタテについて話を伺っただけでなく、ホタテの殻むきと鮭のさばき方も教えていただき、実際

にさばく体験もさせてもらった。ホタテは殻むき専用の道具を使いどのようにやれば綺麗にむけるのか、鮭はさばいただけでなく、いくららの醤油漬けも作らせていただいた。枝幸町の名産品を味わうだけではなく肌で感じることででき、とても貴重な経験となった。

三つ目の魅力「オホーツク文化」は、枝幸町のなかで私が最も魅力を感じている。オホーツク文化とは古墳時代から平安時代に北海道北部に存在した海洋狩猟文化で、アイヌのルーツの1つではないかとも言われている。

同時代の本州の歴史や文化とは違う独特の文化はとても魅力的に私には見える。しかし、オホーツク文化は道内でもあまり知られておらず残念に思う。そこでこの2回の訪問を手がかりとしてさらなる情報収集を行い、オホーツク文化の魅力を伝えることができる卒業論文を書き上げたいと考えている。具体的には、北海道の観光資源に一つとなったアイヌ文化の観光資源化プロセスを検証しつつ、オホーツク

ク文化の知名度を上げる施策について検討するものである。良い卒業論文に仕上げたい。

〇〇〇〇〇

石垣島での1か月―計り知れない感動と学び

高萩玲奈

(英語コミュニケーション専攻 1年)



私は、将来、観光業に就きたいと考えており、観光を提供する側としての知識と物の見方を養いたかった。石垣島でのインターンシップに参加した。勤務先はリゾートホテル、仕事はハウスキーパーとレストランスタッフであった。先生から「毎日、日誌を書くといよいよ」と言われたので、自分の気づきを書き留めてみた。毎日、必ず一つは発見があった。

- ・ 次にすることを予測して、今の行動をすること。
- ・ なんども繰り返し返すと、身体が覚える。
- ・ どんなに大変な日も、ハキハキ仕事をしている。

- ・ お客様に笑顔を向ければ、お客様が気持ちよく食事ができる。
- ・ 対応が難しいお客様にこそ、満面の笑みを忘れないこと。
- ・ できると思えば、大抵のことはできるということ。

ハウスキーパーはお客様と直接関わることは少なく、裏方の仕事であるが、ホテルはそういった裏方で頑張っている人たちのおかげで成り立っているということが身にしみて分かった。私たちが普段目に見えている表の部分だけでなく裏(陰)での努力や苦勞を学ぶことができた。

一方、レストランは、接客の仕事である。勤務をしているうちに、私たちがお出しする食事が、お客様がずっと前からワクワクしながら計画した楽しい旅行の1ページになると知った。そうなるとなおさら、その1ページが残念なものならぬよう、私たちができる精一杯のおもてなしが大切であるということを感じた。

レストラン業務の時にお世話になった方からは、夢を追いかけることは何なのか、夢と目標はどう違うのかなど、仕事の上だけではなく人生において大切なことまで教えていただいた。職場だけでなく、休日に出かけた時も学びは多かった。ある観光施設で働く男性は、元々、海に潜って仕事をしていたが、事故によって海に潜れなくなってしまったそうだ。過去に辛い経験を背負っていても、本人次第でいくらでも人生を楽しく生きていけると改めて知った。そして先輩方の背中からも学ぶこともあった。

印象的だったのは、お金で物を買うのではなく経験を買うという考えだ。少し自分の世界を飛び出しただけで、こんなにも多くの景色と経験を吸収できることに驚いた。もっともっと、いろんなことを吸収したい!! 妥協せず、もっと自分の世界を飛び出して、広げていきたいと思う。

石垣島のホテルでのかけがいのない経験は、海がきれい!と感じるだけではない、計り知れない感動と学びそのものであった。

ヒューマンライブラリー(HL)プロジェクトについて

——誰にでも語れるストーリーがある

経済学部准教授 山下美樹



プロジェクトの概要

麗澤大学経済学部山下ゼミでは、人が「本」となりさまざまな人生体験を語り、その本から直接話を聴き、自分自身についても考える体験型イベント、ヒューマンライブラリーを定期的で開催している。

ヒューマンライブラリー(HL)とは、2000年にデンマークで発祥した多種多様な語り手から話を聞き、対話から異文化を学ぶイベントである。読者(聴き手)は本(語り手)から30分間、「本」1対「読者」1(1対5まで可)で話を聴き、自分自身についても考えることができる。山下ゼミでは

「異文化を学び、私たちを取り巻く社会と世界を包括的に考える」「新しい自己発見」「いかに生きるかを考える」の3つを目指し実施している。

1 ヒューマンライブラリーの構造

HLの構造は「本」「読者」「司書」の3者構造である。1つ目が「本」(語り手)役。HLでは、一般に本役は偏見を持たれやすい人々、例えば、性同一性障がい者、身体障がい者、元薬物依存症、無国籍者、元ホームレス、難民、イスラム教徒、多重人格者などの方々が努めるが、誰もが「本」として語り手になることができる。2つ目が「読者」(聴き

手)。参加費は無料である。山下ゼミでは地域と大学を繋ぐために学生のみならず、地域に一般公開した。3つ目の「司書」(コーディネーター)はゼミ生が担当。本役探し、依頼、打ち合わせ、本イベントの企画、運営、振り返りの一連の過程を自主的に遂

行する。

これまでたくさんの方々の本役として参加していただき、その多くが普段会うことのできない方々であった。

〈近隣住人・近隣在勤者〉

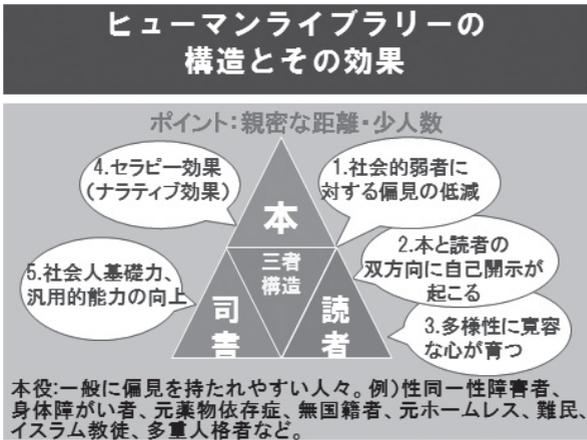
- ・体が男性でも心は女性。日本舞踊・華道師範。和風居酒屋の経営者
- ・歌にギターに英会話、パン作りも本格派のマルチ活動する粋な男性
- ・全身リウマチで数か月の寝たきりを経験し、人生が大転換した育児ママ

〈本学学部生〉

- ・癌と闘いながらもアイドルとして活躍し、人生を全うした姉について語る妹

〈本学留学生〉

- ・アメリカのデート、日本のデートについて語るアメリカ人留学生
- ・韓国での徴兵を通して成長した経験を語る韓国



人留学生

- ・台湾と日本の違いについて語る台湾人留学生
 - ・イスラム教について語るマレーシア人留学生
- 〈大学職員〉

- ・韓国での徴兵経験とさまざまなエピソードにつ



いて語る大学職員

〈大学OB〉

- ・経営コンサルタント・シェアクスピアの専門
家・実業家
- ・盲目の高校教師

〈川口市ヒューマンライブラリーからご紹介いただいた方〉

- ・生まれつきの眼瞼下垂症であり、患者会NPO
立ち上げスタッフ

〈麗澤大学ヒューマンライブラリーfacebookを見て
飛び入り参加してくださった方〉

- ・外見からは判断できない、健常者の姿をした障
がい者

〈起業家・実業家〉

- ・エリート銀行員、企業コンサルタント会社役員
を経て、現在、障がい者と健常者が一緒に働く
上質なチョコレート会社を創立した会長／代表
取締役

- ・考え方ひとつで人生は変わると語る、宇宙シス

テム開発利用推進機構で活躍中の宇宙学者

- ・某大手電機メーカーを退職後、コンサルタント
会社を設立した社長・社会労務士

- ・日本人にとっての不愉快な事実、血沸き肉躍る
可能性について語る、某有名コンサルタント会
社社長

- ・失うものより得るものに着目することについて
語るライフコーティング会社女性社長

- ・世界で活躍するためのアイデンティティについ
て語るマルチな女性歌手

〈ROCK会員〉

- ・8名のROCK会員の方々

2 HLの効果

HLのポイントには密接な距離間で、少人数（本
1・読者1〜5）で行われるところにある。そのた
め次のような効果が表れる。まず、社会的弱者に対
する偏見の低減が期待される。例えば、読者（聴き
手）が性同一性障がいの方を「異常な性志向を持つ

◀障がい者への聴き取りを行うゼミ生



▼2015年異文化コミュニケーション学
会での発表



人」と見ていた場合、一対一で「対話」をすることにより、お互いの共通点が見つかり「同じ人間である」と見方が変わることが期待される。次に、対話の中で本と読者の双方で「自己開示の返報性」が起る。読者として参加していたのに、本の話を読んでいるうちに気が付いたら自分自身の悩みを打ち明けていたという人もある。この対話から多様性に寛容な心が育つことが期待できる。異なる価値観・信念・態度などに遭遇したときが、自己を知り、他者を知る絶好の機会となる。対話の中で相手との相違点を確認することで、エンパシースキル（感情移入）が向上する。これが、「社会的パワー構造」が造り出している「マジョリティー・マイノリティーとは何か」について考えるきっかけとなり、社会変革にも繋がることを期待できる。また本役にとっても語ることで癒しの効果が表れる。例えば、元無国籍であった女性は、国籍を持たず辛い経験をしたことを語ることで、それが心の癒しとなっていると語っていた。

HLに参加した方々からのコメントとして、読者（聴き手）からは、「今後どんなことがあっても乗り越えられる勇気を与えられた」「普段会えないような方々と共感でき嬉しかった」本役からは、「とても楽しく、良い経験になった」「自分のことを振り返ることができてよかった」などがあつた。司書（ゼミ生）からは、「いろいろな方にお会いできて楽しかった」「もの見方が変わった」「自分自身のことを振り返るきっかけとなった」「本役にも自分のことをもっと知って欲しい」などが寄せられた。また、司書役のゼミ生たちには、HLを運営することで、実際に社会人基礎力、汎用的能力の向上も見られた。

これまでの山下ゼミHL開催実績

第1回目は麗澤大学生涯教育プラザにて、2015年7月12日（日）に開催。テーマは「キャリアと人生観」。本役は主に大学近隣の在住者・在勤者に依頼した。この成果を異文化コミュニケーション学

会でゼミ生5名と発表した。ゼミ生たちは発表内容の分担、学会会場までの移動などを含め、全員力を併せ取り組むことで団結力が高まった。会場ではよい評価をいただいた。第2回目は、同じく生涯教育プラザにて2015年11月29日（日）に開催。テーマは「さまざまな語りから学ぶ」であり、第3回目

は、麗澤大学東京研究センターにて、2016年7月1日（金）に開催。テーマは「私の生き方・世界的に活躍する起業家・活動家から聴く」と題し、今回の本役は、起業家・活動家の方々が参加し、読者には駒澤大学HLゼミ生、日本フィランソロピー協会の方、本学職員を招待し開催した。他大学のゼミ生との交流ができたことも、大きな収穫であった。第4回目は、2016年11月15、22、29日の火曜日3週連続、ROCK会員の方々のコラボで「世代を超えて・語りの交差点から見えてくるもの」と題し、生涯教育プラザにて開催。ROCK（麗澤オーブンカレッジ）会員の方々とゼミ生の年齢差は40歳〜60歳と大幅に異なる世代差があつた



第3回HL（2016年7月）



第1回ヒューマンライブラリーを開催（2015年7月）

が、人生の大先輩方の語りからたくさんの方の知恵を伝授していただいた。

HLの取組内容とその過程

HLプロジェクトをゼミプロジェクトとして導入した理由は、(1)ゼミの共創的学びへの転換、(2)ゼミ生の異文化理解の促進、(3)ゼミ生の社会人基礎力汎用的能力向上である。本プロジェクトを実施するに当たり、Kolb (1976)「経験学習モデル」に沿い、4つのラーニングスタイルを循環的に体験し学びを深めた。

具体例(具体的体験)：実際の体験から具体例を学ぶため、川口市で行われたHLイベントにゼミ生と参加し運営方法を観察した。「具体的」にHLとは何かを体験。

内省(内省的観察)：川口市HLの感想、社会的弱者の立場、社会への問題意識、自分に何ができるかなどの内省を行った。HL準備段階からイベント当

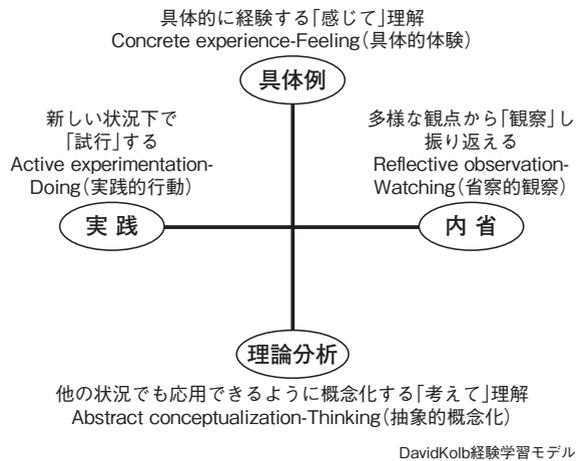


図 4つのラーニングスタイル

日、実施までのチームワーク、その他気づき、問題点等について各自振り返りノートを取り続けた。

理論的分析(抽象的概念化)：司書(ゼミ生)たちはHLの文献を読みHLについて発表。自分たちのHL実施に向けて心の準備を固める。実施場所、状況、テーマ設定を行い、自主的にゼミ以外の時間に会議を開いた。その報告書は担当者が当日中に作成し報告してくれた。

実践(実践的行動)：地域の人々と繋がるきっかけを作るべく、麗澤大学の地域連携センターの力も借りた。司書のゼミ生たちは、それぞれが担当する「本」役の方々と個別に会い、内容説明、シナリオ作成を進めた。Facebookによる広報、大学近隣団地でのチラシ配り(1000枚以上)等も行った。当日は司書が主体的に会場設定からオリエンテーション、受付、読者の誘導、タイムキーピングを行った。今後の調査、論文作成のために本役の方々から個人情報、写真撮影、録音許可、話の内容の使用についての許可を得た。またHL実施後に今後の改善策を話し合った。

策を話し合った。

ゼミ生に見られた異文化理解と汎用的能力の向上

学生の期末レポートから、学生の変容が見られた。〈知識を活用する力・知的好奇心、本質を理解する力、理論的に考える力〉

- ・ HLは読者側のみならず、当事者側両方の偏見に対する心の壁を崩せる。HLは人種差別、高齢者問題、いじめなどさまざまな問題を知り解

- ・ 障がい者かわいそうな人というイメージで一括りにしてしまわないためにもHLは役立つ。相手を知るためには、ネット上ではなく相手の表情から相手が何を考えているのか知ることが大切。

〈人に対する力・多様性を理解する力、チームワーク力、対話力、感情移入する力、発信力〉

- ・ HLプロジェクトを通して、チームワーク、積極性、目上に対するマナーを学ぶことができ

た。HLプロジェクトを通して、メールのやり取りで正しい敬語の使い方を復習することができた。

・相手への気配りをしつつ、人のサポートに回ることでリーダーシップを発揮する方法を学んだ。
〈自分と課題に向き合う力・行動力、自己を受け止める力、自己反省する力、自信を生み出す力〉

・「本」役の方の自分自身を語る勇氣を見て、自分もたくさんの人々と交流したいと思った。先天性の障がいを持つ「本」役の方が「自分を好きになることが大事」であることを教えてくれたおかげで、自分のことをもっと知り好きになるうらと思つた。皆と活動しているうちに自分に自信が出てきて、意見も言えるようになった。さまざまな価値観や人生観を学び、チャンスをつかめる人間になりたいと思う。HLの活動をしなればこんな考え方には絶対にならなかつたと思う。

ゼミ生のHLプロジェクトの振り返り

HL体験記 HLの「司書」を担当すること

大竹 祥太

(経済学科4年)



HLを運営するにあたって、私は誰にお礼を言ったらいいのか分からなくなるくらい大多数の方たちにお世話になった。チームのメンバーをはじめ、「本」や「読者」の方々、麗澤大学の学生事務や地域連携センターの職員の方々、そして何よりヒューマンライブラリーというイベントを教えてくださいました山下先生。彼らがそれぞれ誠意をもってHLに取り組んだことにより、麗澤大学HLは無事成功に終わった。一方、私は初めてこれだけ多くの人たちと連携し、一つのイベントに取り組むことに右往左往した。あつちから連絡をもらってこつちに連絡して、それを記録して、また連絡して……。狭いコミ

ユニティで生きてきた私は、このイベントの運営はすごく大変なもの感じた。しかし、それでも心が折れず、それなりに皆の力になれたのは、第一回麗澤大学HLを開催する数か月前、山下先生と初のゼミメンバーで参加した川口市のHLがあつたからだ。参加する直前までは、「正直面倒だな」と思っていた。だが参加してみたらどうだろう。まず初めて顔を合わせるゼミメンバーはとても打ち解けやすく安心できた。そして川口市のHLに参加した。当日のHLのテーマは、正直言って「重い」と感じるものもあつた。でもそこで待っていた人々は、笑顔でもとても親しみやすく、真剣にHLに取り組んでいる「本」と「読者」と「司書」の方々であつた。このイベントは社会的弱者に対する「偏見の低減」という目的を達成できる素晴らしいイベントだと心揺さぶられた。その時の感動が、後に自分たちがHLを開催するにあたって、私自身の高いモチベーションとなったことは間違いない。山下ゼミHLイベント当日、「司書」としてとても充実した時間を過ご

せた。

○○○○○

HLは体験するもの…直接話を聞いて分かること

藤井 サムエル

(経済学科3年)



川口市のHLでは普段話をする機会がない方々から話を聴くことができた。本役には身体障がい者、多重人格者、LGBTの方々などが参加していた。彼らは社会の中で生きづらさを持ちながらも明るく活発に周りの人に元気を与えるような活動をしている。片足を病気で切断された方は、「片足を無くしたからこそ新しいさまざまな経験ができています。日々を大切に生きることができるようになった」と語った。それを聞き私は驚きや感動を覚えた。また、多重人格者の方は、なぜ多重人格になったかという話をしてくれたが、過去に想像もつかないような悲惨な経験があり、自分の中に別の人格が生まれ

たということである。私は多重人格というのは漫画やドラマでしか見たことがなかったので、少し楽しみにしてしまっていたところあったが、実際はとても辛いことだと分かった。当事者から話を直接聴き考えが180度変わり、初めてのHLの経験はとても素晴らしいものとなった。

私たちが企画・実施したHLでは起業家の方々が本となってくださった。起業家の方々の「未知の経験でも勇気をもって進むことを楽しむ精神」、「宇宙を研究することで人間社会を知る」といった新たな発見ばかりであった。またHLは自分自身を振り返れるよい場となり、これから行動を起こしていくのが楽しみになった。HLの運営を通してゼミ生同士が仲良くなり、目上の人に対するビジネスマナーを学び、なによりもHLの素晴らしさを体験できたことがよかった。

○○○○○

事すべてに意味があったからこそ今があるのではないかと思えるようになった。

HLでは、ただ単純にさまざまな境遇の人々の存在を知れるだけでも、十分価値のあるものだと思う。自分たちが行ったHLでは、企業の社長や取締役の方などエリートと言われる人々から話を聞いた。話を聞いてみると最初から優秀だったわけではなく、辛く険しい人生を歩んで来たことも分かった。ここでも普通の人とあまり変わらないのではないかと思った。HLはまだまだ知名度が低いが広がっていくためにも活動を続けていきたい。

最後に

学生の成長のみならず、HLを実施し大学関係者や地域の方々と関わることで、大学と地域の繋がりが

社会的なカテゴリー化は偏見を生む

二見 恭平

(経済学科3年)



山下ゼミの説明会で初めてHLというイベントを知った。当初は偏見の低減や異文化コミュニケーションについて、少し疑っていた。しかし参加してみると社会的弱者への考え方が変わった。このような人達に直接会うのは初めてで、しかも彼らに対する知識も少なかったために、相手のことを偏見と独断で決めつけてしまっていた。性同一性障がいの方と話をしているなか、自分たちとそんなに変わらないのではないのかとも思えた。人間は直接見たり聞いたりしなければ、正確な情報を得ることができないため、相手を差別してしまおうと思う。HLで語り手の話を聴くうちに、社会的弱者とカテゴリー化されている人々はそのままで不幸ではないのかと思っただ。その方たちはさまざまな悲しいこと、耐えられないようなことを体験してきたと思うが、その出来

を持つことができたことも大きな収穫である。第4回目のHLでは、ゼミ生たちが本として語ったが、それは「自分自身を振り返るよい経験となった」「これから就職活動を控えている3年生、社会人となる4年生にとって有益な機会となった」とコメントしている。実際、4年生が就職活動の際に、自己マニフェストとしてHLの活動について話したところ、どの会社の採用者側もHLについて必ず興味を示してくれたとのことである。「汝自身を知れ」は哲学、コミュニケーション学の原点でもある。HLはそれを可能にする。HLイベントは地域連携センターをはじめ、国際交流センターやキャリアセンターなどの大学関係者、大学外の地域の人々の協力無くしては実現できないものであった。感謝と敬意の念を忘れずに今後も本活動を続けていきたい。

産学連携アクティブラーニング型研究プロジェクトを通じて

〔沖繩の就労率向上を目的とした沖繩県産産コーヒーの可能性〕および「柏駅前活性化のための柏発革製品ブランドの確立」に関するプロジェクトを通じて

経済学部准教授 圓丸 哲麻



本プロジェクトの目的と概要

近年、地域活性化を通じた産学連携型のアクティブラーニングがますます重要視されるようになってきています。ことマーケティング分野においても、近畿大学の「近大まぐろ」に見受けられるように、今日、ビジネスと地域貢献を結びつけるアクティブラーニング型の教育が注目を集めています。本学においても外国語学部・経済学部の取組みの中で、インターンシップを通じた地域の職場体験プロジェクトが稼働しており、本プロジェクトではそれらの潮流を受け、試験的な取組みとしてゼミ生（3

年生）を対象に、ビジネスプランの策定を最終目標とした教育プロジェクトに取り組みました。

本プロジェクトの目的は、①困窮する特定地域の活性化の取組みに参画することで座学のみでは得られない知識の体験的把握、そして②実務に貢献する調査設計やプレゼンテーションを通じた論理力の向上、の大きくは2つです。前者の活動の詳細は後述しますが、主に（a）「沖繩の就労率向上を目的とした沖繩県産産コーヒーの可能性」、（b）「柏駅前活性化のための柏発革製品ブランドの確立」です。後者は、その取組みに学生たちが積極的に参画することで、マーケティングに関する知識をより深化さ

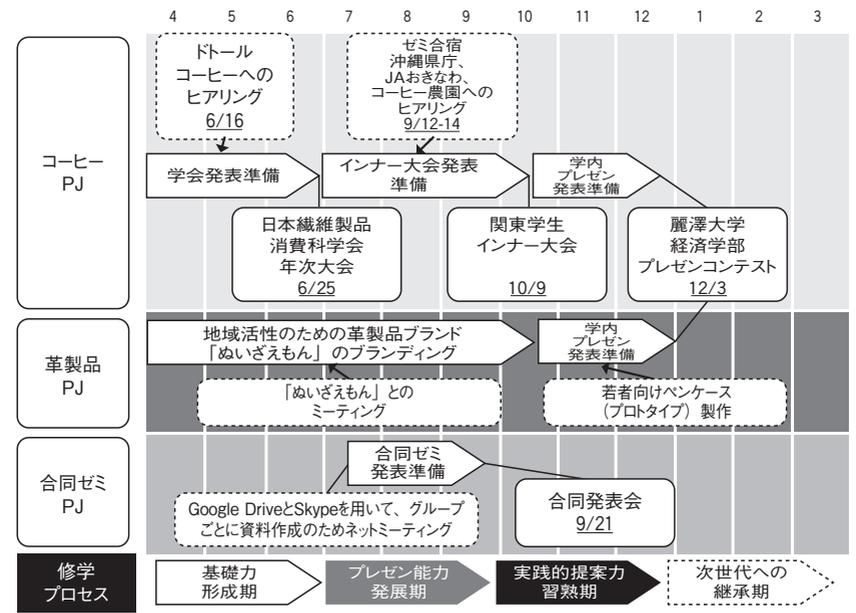
せるだけでなく、さまざまな実務者へのインタビュ―や製品開発や販売体験を通じて、どのような要因が消費者に重要視されているのか、そしてそれらを活かすようなビジネスプランが画策できるのか、実践に則した知識を学ぶことができる、というものです。これらの活動を通じて、市場の把握のためのマーケティング・リサーチ能力（仮説検定）、流通システムの把握、マネジメント能力の醸成といった成果が得られると期待し、プロジェクトを開始しました。

また本プロジェクトでは、日本繊維製品消費科学会での学生部門研究発表（6月）、日経ビジネスアカデミック・サポートプログラムでの関東インナー大会（10月）、そして本学経済学部で開催する学内プレゼンコンテスト（12月）に参加し、産学連携を通じて学んだ知識をアウトプットする機会を企画しました。

加えて夏休みに行った他大学（亜細亜大学の西原ゼミ、小樽商科大学の鈴木ゼミ）との合同ゼミにおい

ても、資生堂や「ブラックサンダー」で有名な有楽製菓のマーケティング担当者から提示された課題を解決するという、（c）ゼミ混合型戦略立案コンペを開催し、マーケティング知識の獲得のみならず、プレゼンテーションやコミュニケーションに関する能力の向上を図りました。

詳細は後述しますが、平成28年度に行った産学連携アクティブラーニングの全体的スケジュールは図1のようになります。本年度のプロジェクトでは、大きく3段階の修学プロセス（想定）として、「基礎力形成期」「プレゼン能力発展期」「実践的提案力習熟期」を設け、学生たちが自ら学び、自ら考え、そして自ら企画することのできる人材の育成をめざし指導してきました。学生たちは、通常の学務（学業）やアルバイトとともに、3つのプロジェクトを同時進行で取り組むことになり、マーケティングの基礎的知識が充分でないこと、また企業の方とディスカッションすることが初めての経験であったこと、そしてやるべき課題が混在していたことなど



平成28年度の産学連携プロジェクトスケジュール

から、当初は困惑し手探り状態でした。しかし時間の経過とともに自分たちで主担当プロジェクトを決め、グループに分かれるなどして、各プロジェクトを効率的に進行できるようになりました。

産学連携プロジェクトa…
沖縄の就労率向上を目的とした沖縄県産コーヒーの可能性

本年度の産学連携アクティブ・ラーニング型研究プロジェクトの中核的研究プロジェクトとして、学長裁量経費をいただいで開始したのが、この沖縄県産コーヒーに関するプロジェクトです。元々、私自身が取り組み始めていた研究でもあったのですが、ゼミ生たちがまだ「何を対象に研究すべきか」について明確な指針を持っていなかったこともあり、一緒に研究を進めることにしました。

研究の導入時期に、「なぜ学生はスターバックスコーヒーに強いブランド意識を保有するのか？」をきっかけとし、まず「コーヒーチェーンの市場における競争優位性」について、若者（10〜20代）を対

象に調査・研究することになりました。6月の学会発表を目標に、市場参画者の明確化、消費者を対象としたアンケート調査の施行、そして始めてのヒアリング調査を行い、コーヒーチェーンの現在の課題を消費者基点で議論しました。

この過程で、近年のコーヒー市場では、コンビニエンスストアの「淹れたてコーヒー」が市場の低価格化をより促進させたことが経済誌をレビューすることで明らかになりました。しかしその一方、アンケート調査の結果を見ると、経済誌で議論されているように消費者志向の二極化（低価格と高価格）が進んでいるのではなく、消費者は高いコーヒーも安いコーヒーも使用目的によって併用していることが分かりました。つまり、コーヒー飲用者は、朝の通学や出勤の前に、あるいは休憩時間に、ちょっとしたリラクスのためにコンビニのコーヒーや缶コーヒー利用している一方で、友人や彼女と飲む時間を過ごす時は、スターバックスをはじめとするコーヒーチェーンで400円前後のコーヒー飲料を飲む



【写真1】 沖縄での農業体験

ている、ということ。自分自身の行動を振り返ってみると「目的によって飲用するコーヒーの価格が変わるのは、当然かな？」とも思われるのですが、彼らが提示した結果は、一般論として言われてきた通説を実証的に反証するものであり、市場の消費者は二極化していると想定していた多くのコーヒー市場に参画する企業の戦略にとって、その戦略の課題を指摘するものです。分析視点やプレゼン資料には課題があったものの、マーケティングにおいて十分に評価できるものでした。

彼らはその後、研究をさらに拡張し、まだまだ生産規模は小さいですが、沖縄県の新たな特産品となりうる沖縄県産国産コーヒーの可能性について研究を

進めることになりました。

この過程では、ゼミ合宿でお伺いした沖縄県庁、JAおきなわ、コーヒー農園従事者（写真1）へのヒアリング調査を基盤とし、現在の沖縄県および沖縄県の農業が直面する課題を把握したうえ、先の調査で分かったコーヒー市場の動向を踏まえ、沖縄県産（国産）コーヒーの市場での可能性を検討しました。そして、多くの実務家とのディスカッションを通じて、立場によって、同じ目的（沖縄の経済の振興）であったとしても意見が異なることを彼らは実感したのです。例えば県庁の視点では、県民全ての利益になるような政策を施行することの優先順位が高く、特定の産業（それも小規模産業）に資産を投入することが難しいといったことであったり、JAとしても新たな産業を模索している一方で、既存の産業の底上げを現行では重要視していたり、農場従事者の方々は各々尽力されているのですが、その取組みの方法や熱意が必ずしも同水準ではなかったりなど、座学のみでは理解できなかつた事態に直面し

把握できたことは、彼らの研究に大きな知見を与えるものでした。

これらの取組みをまとめ、インナー大会で上位入賞をめざしたものの、惜しくも予選で敗退してしまいました。結果としては残念でしたが、彼らの研究の新規性やアプローチの妥当性に関して、審査員の方々から高い評価をいただくことができました。

その後、8人のゼミ生のうち半数の4人が研究を更に発展させ、「沖縄の新たな土産物提案」に関する研究を深め、学内プレゼンコンテストでの優秀賞をいただくことになりました。

産学連携プロジェクト… 柏駅前活性化のための柏発革製品ブランドの確立

コーヒーの研究と並行して取り組んだのが、柏市にある革製品ブランド「ぬいざえもん」のブランド化のお手伝いです。このプロジェクトは、弊学の地域連携センターへの依頼から始まり、私どものゼミとの産学連携を取る形でスタートしました。

「ぬいざえもん」の飯島暁史社長とのミーティングを重ね、大学生向けの製品開発をしようということになりました。学生を対象に、革製品への関心や購買経験、そして購買意図に関するアンケート調査を行い、「大学生は革製品に興味がある一方で、それらに対する知識がなく、本革製品と合皮製品の違いが認識できていない」や「革製品の価格が妥当と思えず、高く感じる」などの意見があることが分かりました。

この結果を受け、革製品を持ったことのない学生に購入しやすい本革製品を試験的に製作することになりました。本年度は、プロトタイプとしてペンケースを作成していただきました（写真2）。

その後、このペンケース

に関する学生を対象としたアンケート結果を更に推し進め、消費者の購買に関して検討しました。分析の結果、まず地域ブランドとして確立することが重要であるという結論に至りました。この結果と結論を踏まえ、現在では、飯島社長と共に「ぬいざえもん」の新たなブランド「KASHIWA LEATHER」を立ち上げ、柏市役所とも提携し、柏を代表するブランドを目指し、となるよう、引き継ぎ提携しブランドینگしていくことになりました。

また本プロジェクトに関する研究成果も、学内プレゼンコンテストで発表し、ビジネスプラン部門で最優秀賞をいただくことができました。

産学連携プロジェクト…他大学との合同ゼミ

上述のプロジェクトと共に、他大学との合同ゼミも開催しました。この取組みでは、学生たちを、所属大学を越えたグループに分類し、資生堂と有楽製菓から提示された経営課題のどちらかに対して戦略を立案するか、というコンペ形式を採用しました。



【写真2】プロトタイプのペンケースを作成

9月の合同ゼミに向けて戦略を考えるわけですが、北海道在住の学生がいるため直接顔を合わせて議論することはできません。そこで、学生たちにはskype&Google Driveといったネットツールを活用し、自分たちの都合のいい時間にオンライン上で集まり会議や資料作成に準じてもらいました。「会議になかなか参加しない人がいる」や「意見をしっかりと受け止めてくれない」など、学生間でのやりとりで不具合があったとの声を耳にしたこともありましたが、自主的に参画した学生たちのその後の活動を見ていると、作業効率や議論の精度が格段にアップしたことは確実です。

学会発表、インナー大会、 そして学内プレゼンコンテストでの上位入賞

本年度の産学連携アクティブ・ラーニング型研究プロジェクトでは、先にも述べましたように学会発表、インナー大会、そして学内プレゼンコンテストで研究成果を発表してきました。当初の目標であっ

た、インナー大会での上位入賞は叶いませでしたが、学内プレゼンコンテスト（写真3）で入賞させていただいたのも、産学連携を基点とした修学の成果であると実感しております。

本プロジェクトを振り返って

本年度のプロジェクトを振り返ってみると、当初の目的であった、①困窮する特定地域の活性化の取組みに参画することで座学のみで得られない知識の体験的把握、そして②実務に貢献しうる調査設計やプレゼンテーションを通じた論理力の向上、に関しては達成できました。また、アンケート調



【写真3】学内のプレゼン大会で最優秀賞を受賞

查およびその分析（統計）に関しては、より精進して欲しいとは思いますが、自主的に考え、目的を持ってデータ（二次データ）を収集し、この1年で、各自が自身の意見が述べられるようになりました。このようにゼミのメンバーが、自信を持って社会に送り出せる人材へと大きく成長できたことが、何よりも嬉しく思います。今後も引き続き、諸先輩の先生方のお力を借りしながらですが、産学連携プロジェクトを通じ、社会に通じる学生たちの育成に貢献していきたいと考えております。

プロジェクト参加者の感想

ゼミで学んだこと

荻野 由加

（経営学科3年）

私は、大学3年の春から圓丸ゼミに所属し、マーケティングを中心に学んできました。1年間（平成

28年度）のゼミ活動を通して学んだこと、気づいたことをお伝えできればと思います。

まず私が圓丸ゼミを志望した理由は、他のゼミにはない学会発表やインカレ、学内のプレゼンテーションコンテストといった実践的な授業が多くあるということです。今までの講義ではどうしても受け身の授業になりがちでしたが、就職活動を意識し、ゼミ内における発言、発表を重視し、ディスカッション・プレゼンテーション能力を向上させたいという思いから志望しました。

そして学会発表やインカレ、インナー大会などの活動をしていく中で見えてきた私の課題は、自分の意見が上手に主張できないという点です。私は昔から人前で発表したり自分の意見を言うことが不得意で、今回のゼミ活動でも人の意見に同意するばかりで、なかなか自分の意見を主張したり、人の意見に反論することができませんでした。今、思い出してもゼミの中で一番苦労したことは自分の意見を主張することでした。しかし何度もディスカッションや

プレゼンテーションを重ねていくうちに発表の仕方や自分の意見を相手に伝える力が少しずつですが身についてきていることを実感し、これが自信となり、発言につながったと感じています。

また、そうした経験をすることで感じたことは他にもあります。自分自身が発表するという経験も大切ですが、同僚の発表する姿をしつかりと観察することも重要だということです。それは、他人の発表を見て自分の持っていない他人の良さを見つけて吸収することができるからです。実際に見ていて、優勝チームから感じた所は極めてしつかり準備をしてきているという印象でした。質問されるであろう箇所はリストアップ、相手を惹きつける話し方、見やすい資料などのプレゼンテーションは準備に比例するということを強く感じ、次のプレゼンに生かすことができました。その結果、学内でのプレゼンテーションコンテストで優秀賞という結果を残すことができました。

学会発表やインナー大会をはじめ、さまざまな大

会への取り組み（参加）は大変でしたが、本当にいい経験になりました。私はこのゼミでの活動を通して自分の意見を主張することの難しさと重要性を、改めて強く感じました。今後、就活をしていく中で自分の意見を主張することは極めて重要になってくると思うので、今後、活かしていきたいと考えています。

加えて、この経験を通じ仲間の大切さも学ぶことができました。主張できず悩んでいるときには個別に意見を聞いてくれたり、話を振ってくれたりしてくれた友達がいるということも大きかったのだなと感謝しています。そして私が学んだことを後輩へとしつかり引き継いでいければと思っています。

〇〇〇〇〇

圓丸ゼミナールを通じて学んだこと

小屋裕太

（経営学科3年）

まずはじめに、圓丸ゼミで、どのようなことをして、どのようなことを学んだのかをイメージしていただくために、ゼミ活動内容を説明したいと思います。

ゼミ活動を開始したのは2月中旬です。そこでは教科書『1からのマーケティング』を通じてプレゼンテーションを上級生に向けて行いました。少し期間は空いて、6月に先生のコーヒーについての研究を借りて学会発表を行いました。その頃から柏の革製品メーカーと関わらせていただいて、実際に現場に出て経営を学ぶことができました。9月はとても忙しく、他大学の方とグループを編成し、資生堂、有楽製菓のマーケティング部署の方にプレゼンテーションを行いました。コーヒーの研究の一環として農協、農園、県庁の三者にお話を聞くため沖縄にも行きました。他にも日経新聞が協賛しているインナ

ー大会にも参加しました。9月は柏の革製品メーカーとも並行して行っていたので、とても力のついた期間でした。10月、11月は学内プレゼンコンテストに向けての資料の作成でした。それ以降の期間は卒業論文、就職活動を本格的に行っています。

私が圓丸ゼミを通して学んだことは、物事を柔軟に相手の立場になって考えるということです。それだけではなく、プレゼンテーションの作り方、マーケティングの基礎や実際の社会に出た時のノウハウと、細く分ければ他にも多く学んだことがあります。小さな小さな学びを1つひとつ説明して、この文章を読んでくださった方に少しでも役に立てばと思います。総括すると、「物事を柔軟に相手の立場になって考えること」であると断言できます。しかし、そこにたどり着くために多くの苦労をしましたが、苦労をした分、その考えは自分に大きな気づきと大きな成長に繋がったと実感しています。

私は大学生活の中で大きく2回成長したと思っています。1回目は2年生の第2学期、2回目は3

年のゼミに入ってからです。麗澤に入り、このゼミで多くの事を吸収できたからこそと思ったことがありました。もっと早くから今のような考え方にたどり着ければもっとよかったですと強く思います。1年生では、経済の英語のクラスで1年間英語に特化してビジネス英語を学んできましたが、私の意識の低さがその学びを妨げて、全く身につきませんでした。2年生になっても、あまり自分自身の中で身についたと思うことが少なかつたように思います。この

1・2年の2年間を振り返り考えると、もっと勉強しておけば良かったと後悔が残ります。私と同じような後悔をしないよう積極的にティーチングアシスタントなどを通して、後輩に「勉強が楽しい」と思ってもらえるように考えています。しかも圓丸先生から学んだ、物事を柔軟に考えるという、色々な立場からの意見を促したり、相手の立場になつて考えることを上手く言うよう心がけています。

この圓丸ゼミで、私は本当に数多くのことを学ぶことができたと思っています。この文章を通じて自

分を振り返り、悔いのない充実した大学生活を送れる人がひとりでも出てきてくれたら幸いです。このような考え方を与えてくれた圓丸先生には心から感謝しています。

〇〇〇〇〇

「産学連携アクティブ・ラーニング」を通して学んだこと

園部 勝己

(経済学科3年)

麗澤大学では、3年次よりゼミナールを履修します。私が所属している「圓丸ゼミ」では「産学連携アクティブ・ラーニング型研究プロジェクト」を行っています。「産学連携アクティブ・ラーニング」とは、従来の講義スタイルではなく、学生と民間企業が連携を取り体験や調査、グループディスカッションなどを有効に取り入れ、学生自身が能動的に学習に取り組む学習法です。

現在、私は革製品を取り扱っている企業と連携を

取り、企業並びに周辺地域の活性化を目的とした研究を行っています。研究を進めるにあたって企業の方とディスカッションをさせていただきました。ディスカッションを通して本質的な課題や企業側と学生側の考え方の相違が見え、課題を持ち帰りグループディスカッションやアンケートを繰り返し課題解決に向け研究をしています。今後の取組みとしては、学生の目線から若者に向けた新たなブランドの設立を提案しています。

本プロジェクトは大学の授業の応用だと思いません。授業で学んだ専門的な知識を活かして意見を出し合い考える、情報を分かりやすくまとめるなどの活動を介してより深い専門知識や問題に対する解決力を効果的に得ることができるプロジェクトです。

私は、人見知りや初対面の人と話をするのがとても苦手です。ましてや、企業の方と正式にお話をさせていただくと緊張から足が震えてしまいます。そんな私ですから、実際の企業が抱えている課題を解決に向けて考え、話し合い、提案をするこ

となどはとても難しいことと考えていました。プロジェクトを進めていき、はじめの頃はディスカッションなのにあまり発言できませんでしたが、ディスカッションの回数を重ねるうちに、少しずつですが、自分の意見や考えが発言できるようになりました。

本プロジェクトは、これから将来、社会に出るにあたって、必要なコミュニケーション力の向上や専門的な知識、実践的な知識を得ることができる絶好のチャンスです。そして何より、プロジェクトを通して「社会に出ても通用する」と実感することができ、自信にも繋がりました。その自信は、必ずや就職活動や職に就いた際の大きな強みとして生きてくると思います。私は、このプロジェクトで得た知識や経験を生かし、即戦力として社会に貢献、そして日本のみならず世界に大きく羽ばたいていけるような人間になりたいと思っています。

3年間の活動から得たもの

渡部 梨沙

(日本語・国際コミュニケーション専攻3年)



11月初旬の3日間、第53回麗陵祭が開催され、8000人を超える来場者に「心が晴れるお祭り」を楽しんでいただくことができました。麗陵祭を開催するにあたり、職員の皆様、地域の皆様にご協力いただきました。そして何より、204人の麗陵祭実行委員会の局員1人ひとりが頑張りました。委員長として3年間の活動に終止符を打てたこと、そして何より素晴らしい仲間たちに出会えたこの青春は、私にとってかけがえのないものとなりました。ここでは私自身の麗陵祭実行委員会の一員としての3年間を振り返るとともに、委員長として得たものを記せたら……と思います。

1年目の2014年、私は友人に手を取られて学生会麗陵祭実行委員会の入局希望用紙を提出して目立った局ではありませんでしたが、仕事内容の魅力にすぐに引き込まれてしまいました。広報局の主たる仕事は麗陵祭の情報を外局に向けて発信し、麗陵祭の開催概要、つまり来場したいと考えている方々に一番に見ていただきたい内容づくりなのです。どうしたら目に止めていただけるか、アピールできるのかを仲間や先輩たちと考えることがとても楽しく、充実した1年でした。

そして2年目の2015年、例年にはないことが

起こりました。例年の流れですと、局のリーダー(局長)を務めるのは3年生でした。ところが広報局からは3年生は出せない、という事態が起こってしまい、局長になったのは、2年生の私でした。先輩に引っついてただ楽しんだ昨年の活動からは一変して、一気に大役、そして責任感、不安感、プレッ

ションがあり、その上には本部があります。それぞれの局長や委員長たちは本部三役に支えられ、何より素敵な広報局局員29名に巡り会うことができ、何とか無事成功を収めることができました。



シャーが私を襲いました。どう活動を進めていいのか、そもそもリーダーとして何をすべきなのか、いくら考えても分かりませんでした。「やってやる」という気概だけは常にありました。麗陵祭実行委員会は広報局のほかに、企画局、装飾局、対外局、総

務局があり、その上には本部があります。それぞれの局長や委員長たちは本部三役に支えられ、何より素敵な広報局局員29名に巡り会うことができ、何とか無事成功を収めることができました。3年目の2016年、麗陵祭実行委員会での最後の1年。委員長としての1年間が始まりました。やるからには、例年の麗陵祭を超えたいという気持ちが強かった私は、各局長に課題を出しました。「少なくとも、何か1つ、新しいことを企画してほしい」と。これまでの麗陵祭の伝統を守ることはもちろん大切ですが、先輩方が築いてきたレールをただ歩くだけでいいのか、挑戦してみてもいいのはいか、と考えていたのです。もちろん新しいことをやるにはそれなりのリスクが伴います。しかも新しいことを企画することは、私の仕事ではありません。先輩たちです。委員長である私が「ああしろ、こうしろ」と指示してしまうと、先輩たちのやりたいと思うことつぶしてしまうので、私は大枠だけを決めることにしました。イメージで言うと、真っ

白い画用紙の形は委員長の私が決めます。その画用紙にカラフルなクレヨン、ペン、色鉛筆で自由に絵を描くのは204人の局員というような感じ。本当に自由に活動してもらおうことにしました。こうすることで様々な新しい提案が各局から集まりました。ただし、先述したように新しいことに挑戦することはリスキーです。担当者には不安やプレッシャーが襲います。

そこで私が心がけたことは一つ、「委員長ではなく、お母さん、お姉さんになるう」ということでした。例年の委員長は後輩との関わりがどうしても少なくなってしまうのと同時に、後輩からは声をかけられなくなってしまう、ただ目上の人という印象が強く、やさしい存在にならう、一人ひとりに寄り添える存在に徹しようと決めていました。お母さんのように頼れる、包容力のある存在に、お姉さんのように何でも相談できる存在になることが、私の目標でした。こうしたことから私自身、多くの後輩たちと一

緒に悩んだり考えたりする機会がたくさんありました。

本番の第53回麗陵祭のテーマは「ハレルヤ！」でした。このテーマのおかげなのか、204人全員が準備段階での頑張りや認められたのか、何年か振りに開催日3日間全日晴天に恵まれました。もうこの上ない嬉しさでいっぱいでした。

私がこの3年間で得た最も大きなこと、それは周りの人々の存在の大きさです。「渡部さんが委員長だったから成功したんだよ」とか「200人以上もまとめるの大変だったでしょ？」という言葉をも、みなからかけていただきました。

実際、私だけが頑張ったわけではありません。仕事の楽しさを知り、一生懸命に活動した1年生、班長として新しいことにたくさんチャレンジをしてくれた2年生、下級生を引っ張っていくとともに後輩へ伝えることはしっかりと伝えてきた3年生、それぞれの局員をまとめ上げた局長5人、私の不安やプレッシャーを取り除いてくれた本部会計と副委員



長、麗澤大学と廣池学園の職員の皆様、地域の皆様、企業の皆様、参加してくださった団体の皆さんが頑張ってくれたからこそ成功なのです。

それに、204人をまとめあげたという意識は全くありません。ふざけるときはみんなと一緒にふざけ、仕事モードのときはみんなできっかりと麗陵祭に向けて仕事をするという姿勢だけは見せていました。私はただ、みんなが活動しやすい環境を提供したかっただけなのです。そして来年度以降もずっと繋がる「麗陵祭のよき伝統」を伝え続けてほしい、というメッセージだけは伝え続けたつもりです。

麗陵祭当日、7〜8年前の局員だったOB・OGが昔の仲間と一緒に会ったこともない私たちに差し入れを持ってきてくださいました。

このようにこの麗陵祭実行委員会では出会った仲間たちと、今後何年も繋がりが続け、麗陵祭に帰ってきたいですね。そのために、「後輩たち、バトンは渡しましたよ！」

黒須ゼミに感謝

篠原ゆめか

(旧姓 光武)

第70期 英語学科卒



大学1年生の必修授業で初めて黒須先生にお会いした時、厳しさの中にある優しさ、そして深い授業内容に一瞬にして虜になりました。これが、黒須ゼミへの第一歩でした。

私にとって大学で学ぶということは常識と呼ばれるボーダーラインをいかに深く探るか、ということだと思いついていました。しかし、黒須ゼミでの「常識を疑え」という考えに、自分自身の物の見方が180度変わりました。一つのことを多面から捉え、自由に意見を交換し討論することのゼミのスタイルに多くのことを学び成長できたと感じます。

学生だった頃、OB・OGの方々が黒須ゼミにお

見えになり、鋭い指摘や新しい視点がとても刺激的だったことを鮮明に覚えています。本来、大学を卒業するとなかなか母校へ足を運ぶチャンスは少なくなりますが、快くOB・OGを受け入れてくださる黒須先生の寛大さに、ついつい甘えてしまい、自分がOGとなった今も、学生に戻ったような気持ちで後輩たちのゼミ発表に参加し、刺激的なディベートを楽しみ、有意義な時を過ごすことができます。これは黒須ゼミの魅力の一つと言えます。また年代を問わず特別な信頼で繋がる縦と横の人間関係こそが「黒須ゼミの一員になれて本当に幸せ」と皆が素直に思える要因でしょう。黒須先生の考えを次の世代

にも繋げていきたいと思わせるほどのパワーが満ち溢れる、それが黒須ゼミなのです。

私は大学卒業後、度々黒須ゼミに参加させていただき毎回感じることは「学生たちの成長」です。特に3年生の成長には目を見張るものがあります。麗陵祭では、3年生による発表と討論会があります。



夏には合宿を行い、皆で決めたテーマについて多くの仲間ととことん深く掘り下げて考え抜きます。私自身にとっても、当時経験した夏合宿での思い出は忘れることができません。合宿ではOB・OGによるワークショップも行われ、普段の授業とは一味も二味も異なる刺激を受けることができます。麗陵祭での発表、討論会では回を重ねるごとに

現代社会における「家族社会学」について深く掘り下げ、日本における「家族社会学」の何たるやを自分の人生に置き換えて考える内容へと進化しているように感じます。このように大きなテーマに斬新な切り口による物の捉え方で挑む討論会は一見の価値があります。

黒須ゼミ最大の難所は4年生の卒業論文口頭発表会です。卒業論文ができあがるまで、4年生は今までに経験したことのないプレッシャーの中、奮闘し、論文を書き上げます。これは自分との戦いであり、学生生活の中で一番厳しい評価を受ける場となります。今までにない先生の厳しいお言葉に、心がくじけそうになることも度々あるでしょう。今にして思えば、卒業論文のテーマを深く追求するだけでなく、社会人になる前に本来の自分自身を見つめ直す有意義な時間でもあったのだと気づかされました。私は「英語教育」をテーマに卒業論文を書きました。日本における英語教育と世界の英語教育を比較し、学校教育だけでなく家庭における親子関係も英

語を学習する意欲に繋がると考えました。私の卒業論文は「家族社会学」からかけ離れたテーマのように思いましたが、黒須先生のご指導の下、社会学的な観点を取り入れ書き上げることができました。私は英語の文献もと考え、必死の思いで文献を訳し卒業論文に取り入れました。私の力不足の文章をニッコリ笑って厳しく添削してくださった時、卒業できないかもしれないと本気で心配したことは今では良い思い出です。

卒業論文の口頭発表会では3年生の討論会のような和やかなムードとは一変し、張り詰めた空気の中で発表が行われます。その発表会ではOB・OGはもちろんのこと、他学部の教授や大学関係者、また学生の家族等が一堂に集まります。自分一人にサポートが当てられるという状況ですので、緊張で手が震え何をどう話し発表したのかあまり覚えていません。全員の発表が終わった後に先生が「おめでとう」と言ってくくださった時、黒須ゼミを卒業する喜びと寂しさで涙を流したことは今でも忘れません。

これは黒須先生が厳しさの中に優しさと愛情を持ってご指導してくださった賜物です。口頭発表会が終わった夜には、黒須先生と4年生での飲み会がありました。ここから学生の時とは異なる、黒須先生との新しい関係が始まります。卒業後も先生が声をかけてくださり、授業や飲み会などに参加しています。学生の時では聞けなかった、黒須先生のプライベートのお話や、グローバルで壮大な世界観を聞くことができます。先生と学生との関係では分からなかった先生のチャーミングな一面を知り、ますます黒須先生が好きになりました。

黒須ゼミに入り、他では絶対に経験することができない、充実した学生生活を送ることができたのは最大の収穫でした。雑談の中からも知的でグローバルな考え方を垣間見ることができ、ますます尊敬し憧れを抱きます。縦と横の繋がりとグローバルで自分を最大限に磨ける最高の場所が黒須ゼミと言えるでしょう。

〈麗陵祭と黒須ゼミ〉

時を越え、縦横につながる黒須ゼミ

（国際交流・国際協力専攻3年）
榊山万葉



私が黒須ゼミに入ろうと思ったきっかけは2年次の第1学期に受けた「社会学概説」です。それまで受けてきた授業のスタイルとはまるで異なり、グループディスカッションや先生との意見交換が、毎回、積極的に行われたことに好印象を抱き、黒須ゼミに入ることを決意しました。

ゼミに入って印象的だったことは、先生やゼミ生全員の距離がすぐに近くなったことでした。当初は、毎週どうなっていくのか期待と不安が入り混じっていましたが、先輩方のアイスブレーキングや先生の導入などで新ゼミ生全員の緊張がほぐれ、良い雰囲気ですタートが切れました。また、先輩方と共

にプレゼンテーションやディスカッションを行い、準備から発表の段階まで共に作業に取り組み、発表した内容に関して学年の壁を取り払って真剣に議論することで、更にコミュニケーションも深まりました。

黒須ゼミを語る上で外せないのが、「縦のつながりの強さ」です。在学生間での関わりはもちろんですが、普段のゼミや合宿等にOB・OGの方々が来てくださるので、交流の機会が頻繁にあり、ほかのゼミでは見られない黒須ゼミだからこそ特別な絆があります。特に、大学祭や合宿時には最近卒業された方々や初代ゼミ生の方々も参加してくださり、



10年以上の年月を経て黒須先生とゼミへの思いの強さが感じ取れました。それと同時に、卒業生の方々に「またゼミに戻ってきたい」と思わせるほどの黒須先生の素晴らしい人間性に尊敬の念を抱いています。

ゼミ生としての1年目は本当に充実していました。毎回のゼミが本当に楽しみで、議論の時間には積極的に発言をし、他のゼミ生の意見に対して違和感を覚えれば納得するまで真剣に話し合いました。また、2016年6月には、廣池千九郎先生誕生150周年記念イベントの一環として、黒須先生が指揮を執り麗澤大学で開催された日本人口学会のサポーターメンバーとして参加させていただきました。日本だけでなく海外からの研究者

も集い、人口学に関連する研究発表をするという貴重な機会に同席させていただくことができました。これも、黒須ゼミ生だからこそできたことです。

しかし、何よりも思い出深いのは大学祭で取り組んだ展示会・討論会までの期間です。合宿を境に大学祭に向けて3年生が研究テーマを決めて、大学祭で発表を行うことが黒須ゼミの伝統行事となっています。私たちの研究テーマは「グローバル時代における異文化交流」でした。グローバル化が進む世界の中で、日本で起こっている「グローバル化によって生じる異文化の衝突」などの紹介を基に、我々日本人にはどのような対応が迫られているのかについて議論しました。私は学年の代表と討論会の司会・進行を担当し、全体の取りまとめに専念しました。代表として常に先頭に立ち、各学生の進捗状況の確認や討論会のアウトラインを作成するなど、普段の学生生活ではできない学びの多い時間を費やしました。大学祭期間中は討論会本番に向けて仲間たちと夜遅くまで大学に残り内容を詰め、翌日には早

い時間帯から大学に集まり準備をするという過酷な日々が続きましたが、「討論会を成功させたい」という想いから気を緩めず一心に取り組みました。そして迎えた討論会本番では、その前日に先輩方に相談し、ようやく定まったアウトラインを基に、司会担当として、参加者全員が議論に参加できるように配慮し、討論を展開しました。日本人学生や保護者の方々のみならず留学生も交えて行ったインターナショナルな議論は終始盛り上がり、無事成功させることができました。多くの方々から3年生に向けてのお褒めの言葉をいただき、「最後まで妥協せずやり切った良かった」と、達成感でいっぱいになりました。この討論会を通じて同期との仲も深まり、いまでは休日にも集まって出かけるほどになりました。素晴らしい経験と仲間を得ることができたこの討論会は、生涯忘れることのできない思い出となりました。

新年度からはいよいよ4年次に突入します。これまでは後輩としてゼミに参加してきましたが、今度

は先輩として、またゼミ長として、新しいゼミ生をサポートする立場になります。私の代のゼミ生が味わった過酷さを私たちが少しでも軽減し、彼らに仲間と共に目標に向けて尽力し達成することの素晴らしさを体感してもらいたいと思います。加えて、私は卒業論文に向けての調査や執筆作業など本格的に卒業を意識して取り組む1年にもなります。大学祭の研究テーマの一環として私が調べた「難民問題」と日本人との関係性などに関連した論文を英語で書く予定です。調査を含めハードワークになるとは思いますが、決して妥協はせず、知識を身に付け様々な形で学びを得て論文の完成に繋がっていきます。残り、あと1年となった黒須ゼミでの時間を大切に、「黒須ゼミにまた戻りたい」と心から思えるような後悔のないラスト1年を過ごしていきたいと思えます。

自分の原点を確認し、麗大の現在を知る旅

中道 嘉彦(34期)

(第13回ホームカミングデー・プロジェクトリーダー)



2003年の秋頃だったと思いますが、当時の平川種徳麗大麗澤会会長からホームカミングデー(以下、HCDと略)を始めるので、その実行委員長を引き受けてもらいたい、とのお話がありました。その頃、全国の各大学では卒業生と母校を結びたいとしてHCDが広がりを見せており、我が麗大もHCDのスタートを切りたいのでは非、とのことでした。当時、私は麗澤会の理事をしており、卒業生の一人として母校への恩返しの意味も込めて、お引き受けしました。

手探りの第1回HCD

HCD委員会が麗澤会内部に設置され、翌2004年2月に第1回委員会を開き、準備を始めました。メンバーは平川会長と私を含めた麗澤会理事5名の、合計6名でした。当初、教職員からの協力はわずかしが得られず、6名で企画立案から実施までをこなさねばなりませんでした。

第1回目のHCDは暗中模索、まさに手探りの中での実施でした。まずはHCDを大学祭期間中に行うか、別日程で実施するかの議論になりましたが、来学する卒業生の皆さんに在学生が活躍する麗澤祭

を見ていただくのが良いのではということになり、麗澤祭期間中の2004年10月31日に決まりました。メインイベントは現麗大麗澤会会長で在イタリア公使などを歴任された楠田正義氏(22期)に、落成して間もない廣池千九郎記念講堂で「ゲルマンとラテンと日本」と題してご講演いただきました。ヨーロッパ理解には必須であるゲルマンとラテンの文化、日本への思い、1993年の天皇・皇后両陛下イタリアご訪問の際に公式通訳を担当されたこと、などをお話しくださり、一同感銘いたしました。

また校舎では卒業生や大学、麗澤会から提供された往時の写真、書簡、その他の資料を数多く展示しました。記念品として校章になっている万両の濃緑色の葉と赤い実をイメージしたバンダナをお土産として用意しました。事業館3Fホールで飲み物とおつまみ程度の立食パーティーを開き、卒業生と教職員との交流を図りました。パーティー終了後、年配のOBの方から「HCD、やってくれてありがとう」とねぎらいの言葉をかけていただきました。

経験を積み上げた第2回〜13回HCD

その後HCDは大学と麗大麗澤会共催の行事として位置付けられ、大学からも財政的・人的な支援が得られるようになりました。私はしばらくお役御免だったのですが、8回目あたりから、またHCDプロジェクトの一員として参画することになり、そして第12回が終わった時、プロジェクトリーダーの井出元はじめ副学長から、次回のリーダーをやってほしいとの依頼がありました。結局、第1回のHCD委員長を務めて12年後に、再びお鉢が回って来たことになります。

2016年の第13回HCDは麗澤祭初日の11月3日に開催されました。13回目ともなると、12年前には6名だった委員会も総勢26名と随分大きくなりました。また仕事は5つの班に分担されています。

①グッズ班は過去のグッズに加えてチロルチョコ、エコバッグ、マグネットクリップなどの新規グッズを製作・販売。

② イベント・展示班は来場者に同日開催の「マイクロネシア・シンポジウム」への参加の呼びかけ、各種写真・卒業記念アルバム・廣池千九郎生誕150年記念のパネル展示、そして閉会式を兼ねたフ



グッズ販売

ィナーレを実施しました。フィナーレでは「創業者生誕150年に想う麗澤の精神」と題して本学の橋本富太郎先生による講演が行われました。

③ 大人のキャリアBAR班はキャリアセンター職員の協力も得て、卒業生が気軽に立ち寄り、お酒も飲めるバーを担当しました。これは毎年好評を博し、HCDの行事としてすっかり定着した感があります。

このほかに④同窓会班、⑤広報班が同窓生などの情報共有に努めました。さらに参加者には受付にて麗陵祭の出店で使える500円分の食券をお渡しし、2日後の麗陵祭最終日のフィナーレでは売上げの多かった団体に「HCD賞」を授与しました。

HCDは自分の原点を確認する、絶好の機会

卒業生の皆さんは4年間の学生生活で、専門的知識を始めとして様々なことを学習・体験し、それら自分の中で咀嚼・吸収し、その後の人生の色々な場面で活かしていると思います。日々の仕事をこな

している時は、大学で学んだことの多くを忘れていますが、HCDを機に母校を訪問し、自分の原点を確認されてはいかがでしょうか。

私は1971年から75年まで麗大のイギリス語学科(定員40名)で学びました。この4年間を中心に学科関連のトピックを箇条書きにしてみます。

・全員タイプライターを持っていた(ドイツ語学科も同様)。1年生の段階で英語の小論文(MLA書式に基づく)を書いた。

・ESSと英語劇の活動が盛んだった。

・川窪啓資先生、田中駿平先生、ギャビン・バンツック先生などは自宅に学生を招き、単位にならない課外授業をしてくださった。

・川窪先生の授業で*The Uprooted*という原書をクラス全員で翻訳した。

・卒業論文は全員英語で書いた。

等々がすぐに思い浮かびます。私が卒業して数年後には、*Early Morning Class*、*Viva Voce*も行われました。今考えると、結構すごいことをやっていたの

です。

私事ですが、私を語源好きにしてくれたエピソードをご紹介します。宗武志先生の授業で *patios* という言葉が出てきました。私はこの言葉の意味を質問しました。先生はギリシャ語やラテン語も用いて詳しく説明され、「哀感」というのが適切な訳語だろう、とおっしゃいました。私は、「哀感」に至るまでの丁寧な説明と、英語の授業なのにギリシャ語やラテン語が黒板にいっぱい並んだのには、本当にびっくりしました。それ以来、辞書を引くときは語源欄も見るようにしています。

HCDは麗大の現状を知る、またとないチャンス

ホームカミングデイ委員会細則に「ホームカミングデイは、卒業生に母校の現状を紹介し、教職員や在学生との親睦・交流を通して母校との絆を深めてもらうとともに、同窓会組織である麗大麗澤会との連携をいっそう強化することを目的として開催す

る」とあります。HCDは卒業生の皆さんに母校の現状を知っていただくのが、その大きな目的です。私は英語専攻所属ですので、どうしても英語中心になってしまいますが、現状を私なりに箇条書きにしてみます。

・1学部、3学科、1学年の定員が90名という恐らく日本で1、2を争う小規模大学から、2学部、定員2400名の中規模大学へ変貌。

・大学院の新設。

・外国語科目には韓国語・タイ語・スペイン語・イタリア語が新たに追加。

・全米模擬国連大会に日本の大学で初めて参加（2016年で第6期）。

・語学検定等による単位認定、学科目・IT環境・留学制度の充実

などが挙げられます。他学部、他専攻の先生や卒業生の皆さんは、まだまだ沢山のトピックをお持ちのことと思います。

プロジェクトリーダーの特権で再度、私事をご紹介します。宗先生の授業で衝撃を受けた私は、語源の知識を自分の授業で活用できないかと常々考えていました。ここ数年、学生さんに「私の語根リスト」と「私の接頭辞・接尾辞リスト」を作ってもらい、評価の参考にしています。長めの英単語は主要な意味を担う語根とその前後に付加された接頭辞と接尾辞から成っています。そういった単語のパーツを数十個集めてリスト化するだけでも、学生さんの単語を見る目が変わりますし、綴りを覚えるのにも役立ちます。このリスト作成は特に検定試験などで高得点を目指す人には力を発揮すると思います。この工夫も麗大の現状の1つといえましょう。

ホームカミングデイは自分の原点を再確認し、麗澤大学の現在を知る良い機会になります。卒業生の皆さん、日常性を離れて、そんな旅に出かけてみませんか？

世界を股に掛けた仕事へ

静岡県立榛原高等学校

吉田 龍弘

(第67期 英語学科卒)



世界を股に掛けて活躍する仲間たち

フェイスブックを開けば、大学生活を共にした仲間
は、国内は勿論、海外で世界中を駆け回り、中には海
外に駐在するなど、世界を股に掛けて仕事する輝かし
い活躍を目にする。お互いにタイミングが合い、彼ら
と飲みに出かければ、世界中の奇想天外な話題が笑い
声と共に食卓を飾り、いつも私を刺激し感化してくれ
る。そんな素晴らしい仲間を与えてくれた大学生活
は、私の宝物である。

大学卒業後、私は都内の広告業界に営業として身を
投じた後、地元である静岡県の教員採用試験に合格

し、現在は駿河湾と茶畑に囲まれた田舎の進学高校で
英語の教鞭を執っている。「世界を股に掛けた仕事」
と聞いたとき「教師」と答える人はまずいないだろ
う。ましてや人口減少で町の存続が危ぶまれるような
田舎で「世界を股に掛けた仕事」なんぞできるのかと
いう疑問を抱く人もいるであろう。それを可能だと思
わせてくれたのが、麗澤での学びであった。

麗澤との出会い

高校3年時の進路面談。私の挙げた、いくつかの志
望校リストを見て、担任の先生は言った。「外国語を
勉強するならこの大学もいい。あまり知られていない

けど、少人数教育でしつかりとやってくれられる大学だ。「えっ？先生……これなんて読むんですか？」

静岡県では「麗澤」という名前をしつかりと読める人は少ない。私が志望校リストに書き出した大学名は、必ず受験生が一度は耳にしたことがあるような大それた学ばかりであった。そんな中、英語教師である担任の先生が麗澤大学を紹介してくれたのは、語学を学ぶ際に最も大切なことが「教育環境」であることを理解していたからであろう。その教育環境を求め、ほぼ決まっていたからであろう。その教育環境を求め、ほぼ決まっていたのは、それこそ入学式を目前に控えた3月下旬であった。

自信を与えてくれた先生と一冊の本

入学後、与えられた教育環境は予想以上のものであった。単に少人数教育というハード面ではなく、それは先生方の親身さや、学友の温かさであった。1年次、英語弁論大会への参加に向け、私はポール・マクベイ教授の研究室を訪ねた。マクベイ先生は初対面

もかわらず私を温かく迎えてくれ、発音やイントネーション、強弱に至るまで多岐にわたるアドバイスをしてくださった。

アパートに帰った後、部屋の壁中に発音や強弱をメモしたスピーチ原稿を貼り出し、夜はその原稿の暗唱とともに眠りにつくといった毎日であった。ひたすら練習に練習を重ね、そのお陰で弁論大会で優勝できたことが、今でも人前に立って英語で仕事をする私の大きな自信に繋がっている。指導最終日にマクベイ先生から「君にこそ必要だ」と言っていて、ご自身の著書を手渡して頂いたことは印象深く覚えている。今でも私のお気に入りの一冊だ。

温かみのある仲間にも恵まれて

とある大学時代のノートが、私の職員室のデスクの中にしまっている。それは大学で最も時間とエネルギーを費やした麗澤祭実行委員会でのものだ。当時私は、学園祭の出店を統括する総務局に所属していた。先輩方は「先輩」というより兄貴、姉貴のような存在

で、優しく、さまざまなことを教えてくれる温かみがあるだけでなく、間違っているときには正しい方向へと導いてくれる理想の先輩方だった。

3年次には総務局の局長を務めたが、ノートはこの時のものだ。そこには我が強かった自分自身への戒め



麗澤祭実行委員の仲間たちとの思い出

の言葉が綴られている。学園祭の仲間とは衝突と和解を繰り返しながらも、多くのことを学ばせてもらった、貴重な3年間であった。忘れてはならない初心を書き留めたそのノートは、デスクを開けるたびに、当時の思いを呼び覚ましてくれる。

突然の訪問者

先日、違う高校に通う男子学生が私を訪ねてきた。彼は3年前、前任校である中学校から送り出した卒業生であった。当時、やんちゃだった彼は、高校卒業後に多くの生徒が就職をする中、大学進学を決めたという。「俺、中学校の頃の先生の授業が好きでした。だから、大学に進学して、英語の先生になりたいと思って……。先生、ありがとう。」少し大人びた彼のその言葉に心の温もりを感じ、私の授業が生徒の人生の中で何かの礎になったことを嬉しく思った。

そんな私の英語の授業の礎は、麗澤大学の望月正道教授の教えによるものだ。私は望月教授のゼミ「英語教育」に所属し、さまざまな教育論に触れ見識を身に



米国生徒に日本についてのプレゼンテーションをする生徒たち

付け、英語科教授法では模擬授業を全て英語で行い、学生間で改善点等を指摘し合いながら相互の指導力を高めた。「英語を英語で教えられる力を身に付けなさい」という望月教授の言葉は、今でも授業づくりをする上で常に私の指針となっており、実際、私の授業のほとんどは英語のみで行っている。いかに楽しくコミ

ュニカティブに、かつ確かな学力を身に付けさせるかが英語教師としての醍醐味だ。それには学びの動機付けが最も大切だ。より生徒が生き活きと英語を学ぶ環境を提供できないだろうか。そんなことを考えながら、日々、授業づくりに取り組んでいる。

教室と世界を繋ぐ

「アメリカではなぜ銃を持つことが許されているのですか？」中学2年生の生徒が授業中に英語で質問をする。その質問の相手は私ではなく、大型テレビに映し出されたオンラインビデオ通話で繋がっているアメリカのユタ州公立中学校の生徒にであった。私はアメリカの先生と共に世界と教室を繋ぐプロジェクトを立ち上げた。

このプロジェクト発足のきっかけは2つある。1つはフルブライトジャパン主催の日米教員交流プログラムの日本教員代表に選ばれたことだ。数週間アメリカのワシントンDC、シアトル、サンフランシスコの学校や教育機関を訪問した。生徒の英語や世界への関心を感化させるには、一番に生徒が世界を直接感じることだと考えていた私は、世界と教室を結ぶプロジェクトの立ち上げをアメリカの先生方に提案し、実行に至ったわけだ。

もう1つは大学時代、町恵理子教授の研究に参加さ



昨年12月に第1子誕生、今年2月にお宮参り

せて頂いたことだ。町教授は麗澤大学と慶應義塾大学の学生、アメリカのエメリー高校の学生とがテレビ会議システムを通して交流し、異文化理解がどのように変容していくのかを研究されていた。私は数回にわたる交流で相互理解を深めた画面上の仲間を、身近な存在として感じるようになっていた。実際、後日、慶應義塾大学の学生と会食をした際には、すでにお互いを分かり合った仲間となっていた。留学経験のない私にとって、この経験は1つのカルチャーショックであった。この体験を生徒たちにも味わってもらいたいと考

えていたのである。

世界を股に掛けて

この世界と教室を繋ぐプロジェクトは現在、アメリカのほかにはパキスタンやフィンランドなどの国々を巻き込み、ニューヨークのジャパンスエティーや東京都立大学の協力を得てSNSを用いた交流や文通活動を行うなど、進化してきている。価値観が異なる世界中の同年代との交流を通して、生徒たちはカルチャーショックを受けながらも、目を輝かしている。世界を股に掛けて英語や異文化を学ぶ生徒たちが、そこにはいる。世界中の教員たちとグローバルな視点で同じ目的を共有し、仕事ができる私は幸せである。そんな今があるのは、やはり過去に出会ってきた全ての方々のお陰なのだ。

現在、私は高校3年生の担任である。先日、1人の生徒が志望校リストを提出した。その中の1つに懐かしい大学名。私は言った。「あまり知られていない大学だけど、学ぶ環境が整っている、良い大学だよ」と。

私にとって武術太極拳とは

荒谷友碩

(中国語専攻4年)



私は7歳から武術太極拳の世界に入りました。きっかけは兄が、その半年ほど前に習い始めていたのですが、送り迎えする母と一緒に体育館で練習風景を見ているうちに、武術太極拳のきっかけに魅了されたのです。初めは長拳という、いわゆるカンフー映画に出てくるようなすばやい動きの種目を習いました。長拳がかっこよく見えたからです。今、私は太極拳の選手ですが、長拳を始めた当時は、太極拳は大人や年配の方がやるものだと思っていました。だから太極拳に対してかっこいいとかそういう印象は全くありませんでした。今では、太極拳もかっこいいと思っています。太極拳を練習するようになったのは、小学4年生の

時、当時の長拳の先生に「君は足腰が弱いから、鍛えるために太極拳か南拳のどちらかを練習したほうがいいよ」と言われたのがきっかけでした。南拳とはその名の通り、中国南方発祥の拳法で発声動作がありません。私は恥ずかしがり屋だったので、大きな声を出さなければならぬ南拳ではなくて、ゆったりとした太極拳を選びました。この選択は、今にして思えば人生の分岐点のようなもので、人生が変わった瞬間だったのかもしれない。私はもともと手足を速く動かすことや力を出すのが苦手だったこともあって長拳はあまり向いていなかったのでしょうか。その反面、太極拳には向いていたのだと思います。

そして、初めて太極拳で全国大会に出場した時、あと一步で入賞というところまでいけ、太極拳なら上を目指せるかもしれないと思いました。しかし全国大会と言っても、私が出場した種目は予選なしで出場できたので、そんなにレベルが高いわけでもなく、ましてその種目は子供用の太極拳種目として新設されたばかり



第1回武術套路ワールドカップ大会(中国・2016年11月)で、「男子太極剣の部」で金メダル、「男子太極拳の部」で銅メダルを獲得。帰国後、中山学長に報告。

りでした。ですから、太極拳だったらいけると勝手に思い込んでいたのです。しかしこの思い込みは、さらに私のモチベーションを高めてくれました。そのおかげで、少しずつうまくなっていき、ライバルに勝ったり負けたりを繰り返しながら今に至りました。

これまで、太極拳の練習なんてしたくない、練習に行きたくない、練習よりも友達と遊びたい。そう思うことは何度もありました。特に高校のころでした。学校帰りに友達が遊んで帰るなか、正直言って、遊びに行きたくて仕方ありませんでしたが、それでも練習をさぼって遊びに行くことはありませんでした。なんだから言っても太極拳が好きだったし、練習もしたかったです。ただ練習に行くまでがづらいという思いだけでした。

友達とはあまり遊ばず、辛い練習を繰り返すという毎日の生活が、普通では考えられないかもしれません。私にとっては当たり前になってしまいました。むしろ練習のない日は何をしていいか分からなくなってしまうほどでした。そのくらい私にとって太極拳と

は、切っても切り離せない関係にありました。一生関わっていただくろうと、小学6年生のころから漠然と思っていました。今では確信を持って言い続けることができます。

麗澤大学へ入学したのも、太極拳のためでした。理由は二つあります。まず一つ目は、太極拳は中国発祥の武術であり、動作名などはすべて中国語です。また、よく合宿で、中国の先生から通訳を介して教わることもありました。その時に私は自分で先生の言っている意味を理解したくて、中国語の勉強をしたいと思っていました。そこで中国語を学ぼうと思い、大学を探していたところ、麗澤大学の中国語は評判がいい、というのを耳にしたので、麗澤大学を！と決めました。

二つ目は、高校3年生の受験を控えた秋ごろ、私は世界ジュニア大会に日本代表として出場することが決まっていたので、受験のために練習を休んだり、量を減らしたりすることはできませんでした。ですから一般受験はきついと思っていたところ、母校には麗澤大

学外国語学部の指定校推薦枠があることを知り、これはもう麗澤に行くしかないと思いました。もともとそういう運命だったのかもしれませんが。いろいろな出来事が巡りにめぐって、今につながっていると私は思います。

麗澤大学で学んだ中国語はとても役に立っています。春休みを利用して、個人で中国に行きプロチームと一緒に練習したり、現地の選手たちと交流したり、現地で購入する時など大いに役に立ちました。生なまの中国語を自分で理解することで太極拳に対する理解も深まりました。選手と中国語で交流して仲良くなることで、その選手からアドバイスももらえました。さらに、太極拳を理解する上で必要不可欠な中国文化に触れることもできました。中国語の文献も読むことができ、麗澤大学で学んだ中国語は、今後の太極拳人生で、ずっと役に立つことでしょう。

私は大学を卒業してからも、選手を続けます。就職はしません。就職をしてしまうと、練習時間が減ったり、練習に行けなかったりすることがあると思うの

で、太極拳のために就職をしないという選択をしました。就職をしない代わりに、イベントでの演武や教室を開講して、武術太極拳の普及活動に関わっていきたいと思っています。

私は太極拳のために、これまで様々な選択をしてきました。それはこれからも変わることはないでしょう。私にとって太極拳は、今や欠かせない存在なのです。

荒谷友碩君の活躍

一、2013年4月29日開催の「全日本武術太極拳競技会」で3位入賞。

本学入学早々、全日本武術太極拳競技会に出場し、「自選難度競技」の「男子太極剣の部」で3位に入賞。「自選難度競技」とは、自分のレベルに応じてバランスや跳躍といった難度の高い技を選んだうえで、全体の演技型を自分で構成。得意な動作や特徴、風格を表

現できる内容の演技型を構成し、その中に難度動作と連接難度動作を何種類、どのように組み込むかという工夫が必要とされる。難度動作が多く含まれることから、日本連盟選手強化委員会が指定する限られた選手のみが、「全日本武術太極拳競技大会」に出場することができる。

二、2013年7月5日～7日、日本代表選手最終選考会を兼ねて開催された「第30回全日本武術太極拳選手権大会」で、「自選難度競技」の「太極剣の部門」と「太極拳の部門」の2種目に出場し、9.33、9.18という高得点をマークした。総合順位が第2位であったことから世界選手権への出場権を獲得した。

三、2013年10月28日～11月6日、マレーシアクアランプールで開催された「第12回世界武術選手権大会」の日本代表選手として出場し、「男子太極剣の部」で8位(9.41)、「男子太極拳の部」では第10位(9.30)。「世界武術選手権大会」は2年ごとに開催され、毎回

80に近い国・地域から選手が参加する「武術のワールドカップ」とも言われている)

四、2014年4月29日の「全日本武術太極拳競技会」で優勝。

「自選難度競技」の「男子太極剣の部」で1位(9.45点)、同「男子太極拳の部」では3位(9.24点)に入賞。

五、2015年7月10日～12日開催の「第32回全日本武術太極拳選手権大会」で、「自選難度競技」の「太極拳の部」と「太極剣の部」の2種目に優勝し、同年11月、インドネシアで開催の「第13回世界武術選手権大会」への日本代表にも選出される。

六、2015年11月14～18日、インドネシアで開催された「第13回世界武術選手権大会」で、「男子太極剣の部」、「男子太極拳の部」の2種目で銀メダルを獲得。これは、今大会で日本が獲得した銀メダルの半数を占めるといふ快挙であった。荒谷君にとっては前回(2013年)の第12回大会に続き、2度目の出場でもあった。

七、2016年9月1日～5日、台湾の桃園アリーナで行われた「第9回アジア武術選手権大会」で、日本代表として出場し、「男子太極剣の部」で準優勝(銀メダル)。

八、2016年11月18日～20日、中国福建省福州市で開催された「第1回武術套路ワールドカップ大会」(国際武術連盟・IWUF主催)で、「男子太極剣の部」で金メダルを獲得し、文字どおり、世界のトップに輝いた。また、「男子太極拳の部」でも、銅メダルを獲得。

本大会は、2015年の「第13回世界武術選手権大会」(インドネシア)で入賞した選手にのみ出場権が与えられていた。

コラム

私と麗澤大学の4年間

気が付けば大学生活最後の年で、私の麗澤大学での4年間を思い返すと、とても充実していました。私の大学生活は「挑戦」という言葉で表すことができず。麗澤大学に入学したからこそできた経験でもあります。1年生の時に留学を決意し、2年生の時に留学を経験、そして帰国してから挑戦した「全米模擬国連大会」は私を大きく成長させてくれました。

英語を会話の面において更に磨きをかけたい、精神的に強くなりたい。そう思って10か月のアメリカ留学を決意しました。アメリカの大学では想像以上に悔しい思いもしました。良かれと思って履修した学部授業はととても難しく、何度も諦めそうになりました。以前

(英語コミュニケーション専攻4年)

小早川恭子



は難しいことや辛いことから逃げる癖があったように思いますが、そんな私の心を叩き直してくれたのが、留学先での学部授業での経験でした。先生の話を聞いていても何を話しているのか全く分からず、学生同士の授業中のディスカッションですら最初はできませんでした。私はこの時、世界のレベルを思い知りました。「現実には甘くない」、まさにその言葉が胸に突き刺さりました。しかしこの現実を打破するには自分で決するしかないと思いました。何事も自分がどんな選択をして、どう行動するかで少しは現状を変えられると知ったのも、この留学を経験したお陰です。

まず、授業で理解できなかったことは先生の研究室

に行って聞いて解決するようにしました。授業の中では答えられる質問に対して、積極的に手を挙げて発言するようにしました。壁にぶつかりはしましたが、留学が終わる頃には達成感を感じることができました。

留学初期に出会った友達に、留学が終わる頃には「英語、すごく上達したね」と言ってもらえました。そこでしか出会えなかった友達、英語が上達したことを思うと留学を経験して良かったと思えました。いろんな壁にぶつかったことで、問題解決力や、辛いことから逃げない忍耐力もつけることができました。しかし私は留学している最中に、あることに気が付きました。

それは、「英語は1つのツールでしかない」ということです。英語はあくまでも言語であり、何をもって英語を必要とするのが重要だということです。

このような思いから、私は留学中に決心したことがあります。それは、「帰国したら模擬国連に参加する」ということです。元々国際協力に興味があった私は、留学で培った英語力を模擬国連の場で発揮したいと思いました。模擬国連に入ってから、コミティー

ことを身を持って感じました。大会に参加してみて、

留学中よりも、英語力も物事に立ち向かう姿勢も大きく成長したように感じました。同時に感じたのは、どれだけ大会に対する意欲や、コミュニケーション能力があったとしても、言語力がなければ意味がないということ。コミュニケーションや発信の手段が英語であるならば、相応の力が必要です。まだまだ私は英語力が足りていないと、世界中の学生と一緒に活動することを通して感じました。だからこそ、学ぶことに



対する原動力になります。

この大会で、麗澤模擬国連団体では初の「ボジションパーパー賞」を受賞することができました。全て、ここまで逃げずにやってきたからこそ得られたものだと思います。この大会で出会った人、経験の全てが私の

リーダーを経験しました。今までの私の人生でリーダーという立場は経験したことがありませんでした。私にとってはこのコミティーリーダーとしての経験は模擬国連活動の中で一番印象に残っています。毎週のよう

にチームメンバーとプレゼンを作成してミーティングの際に発表を行いました。どうしたら期日までに仕事

が片付けられるか、など逆算して物事を考える力がつき

ました。チームとして模擬国連全体のメンバーに迷惑を

かけないように、自分のコミティーメンバーをまとめるのに、

とても悩んだ時期がありました。しかし、その悩んだ時期が私を大きく成長させてくれました。それは、いつの時もメンバーを思いやること

です。一人ひとりの性格や力量を知った上で仕事を投げ

かけてあげることです。世の中でリーダーという立場

にある人は、こんなにも大変だが大きな喜びがあるのだと

知ることができました。

準備期間を終えて、アメリカのワシントンDCで開

かれた「全米模擬国連大会」に参加しました。世界中から集まる学生の数に驚き、大きな大会なのだとい

う

財産です。

この留学と模擬国連を通して、「人は一人では生きていけない」ということを、身を持って感じました。ここまで私がこんなにも素晴らしい経験を

して成長できたのも、いろんな場面で支えてくれる人がいたから

です。このことを肝に銘じて日々を過ごしていきたい

と思います。

今、後輩に伝えたいことは、「自分の可能性を信じて挑戦をして欲しい」ということです。自分の行動次第で、大学生活は良くも悪くもできます。ためらわずに少し難しいと思うようなことにも全力でぶつかって欲しい。全力でぶつかなければ記憶に残りません。どうか辛いことや、困難だと思いうことから逃げないでください。私の麗澤大学での4年間は、一生忘れることのできない4年間になりました。麗澤大学だったからこそ出会った人、チャレンジできたことがありま

した。

◆平成28年は、創立者廣池千九郎生誕150年であった。この記念年に当たり、中山学長は、麗澤教育の原点である創立者の遺志に立ち返り、道徳と倫理に関する学修・教育・研究のグローバルな展開をテーマに掲げ、数々の記念行事を実施した。詳しくは、学長の〈特別寄稿〉と「フォト・アルバム」をご覧ください。

◆生誕150年の関連行事として、「日本人口学会」と「国際人口学会セミナー」が開催された。世界の多くの国々で、少子化、高齢化が加速する中、人口問題には関心が高い。過去と現代をつなぐ、これまでにない長期的な視点と方法から、現代の重要な人口問題に迫る成果を得たという。今後の、更なる研究に期待したい。

◆〈特集〉では、「麗澤型PBL学習」を取り上げた。今や、多くの大学でこの方式が導入されている。PBLは、プロジェクト遂行型学習とか、問題解決型学習といわれるもので、アクティブ・ラーニングを実践する手法の1つとして位置づけられている。身近な問題や事例をテーマに学生が主体的に取り組むことで、教育効果も高く、自身の成長にもつながるといえる。

◆本学では「自主企画ゼミナール」を活用したPBL型学習の取り組みが盛んである。国内では、石垣島でのインターンシップ、沖縄県産コーヒーマーケットでの可能性調査、北海道の枝幸町の魅力の紹介、宮城県南三陸町での活動や地元柏での新ブランドづくりなど、また海外を舞台にしたマイクロネシアでの環境教育、カンボジアでの交通安全教育、ネパールでのボランティア活動などに、多くの学生が熱心に取り組んでいる。

◆体験した学生が、その感想を述べている。笑顔と生き生きとした学生の姿が目につく。

・「教室で行う授業+実体験」で、「使える学び」を実感した。

・ 確実に私を成長させてくれた。まさに生きた学習法である。

・ こんなにも「学ぶこと」に夢中になったのは人生で初めてである。この学習効果とその魅力により多くの学生に、いやむしる教育関係者に伝えたい。

◆本誌の内容に関するご意見、ご感想は、麗澤大学学務部入試広報グループまでご一報ください。

麗澤大学学務部入試広報グループ

『麗澤教育』第二十三号

二〇一七年四月一日

編集 麗澤大学学務部入試広報グループ

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七二七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

